

41871

教科書文庫

4

815

41-1912

20000

41462

Kodak Gray Scale



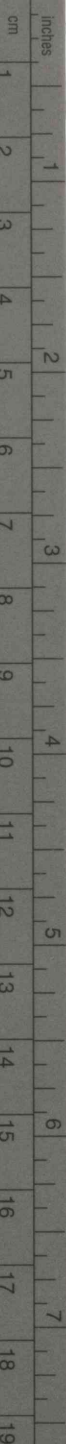
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



3759
Shu14
資料室

新定
教科

日本文典

文部省検定済
新村出編
全



3759
SK114

資料室

P. Shyehana

教育部檢定

大正十年十月廿三日 中華師範學校國語科用

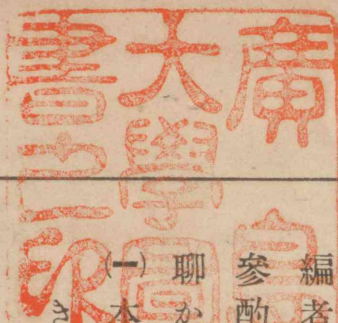
京都帝國大學
文科大學教授

文學博士

新村 出編

新定 教 日本文典

東京 開成館藏版



例言

本書はさきに中學校、師範學校等の國文法教科書として編纂したる「普通教育」日本文典を刪修して、新定教授要目に適合せしめたるものなり。今本書編纂の趣旨を申明すること、左の如し。

編者は國語法最近の研究と國語教育現在及び將來の要望とを參酌し、本書によりて、在來の類書以外に、敘述、説明の方法の上に聊か一生面を開かんことを試みたり。

(一) 本書は一卷を三篇に分ち、第一篇には單語の類別の大要を説きたり。

所謂數詞を名詞の一種とし、名目の統一を圖るがために、これを表數名詞と名づけ、名詞との關係をば明確に説明して、混同することなからしめたり。

(二) 第二篇には、おもに單語に關する法格の最も重要なものた

例言

る用言、助動詞及び助詞の活用、連結、承接の法則を説き、終に品詞の轉成及び單語の構成を論じて、單語篇を結べり。

一。動詞形容詞助動詞の活用は、單語篇中の最も重要な事項なれば、特に丁寧に説明し、口語と對照して、その活用の異同を知らしめ、旁これによりて國語變遷の一斑を覺らしめんことを圖れり。

二。動詞の假名遣及び動詞の音便を動詞の章にて詳説し、既に假名遣を學びたる者のためには、その復習に資し、未だ學ばざる者のためには、これによりて假名遣中の最も重要な知識を組織的に授けんことを圖れり。

三。「明に」遙に「爛漫と」洋々となどを副詞と定め、また形容詞の連用形の轉じたるものをばすべて副詞と見做し、これらの諸副詞と「あり」との複合せるものを形容動詞と名づけ、動詞の一種として説きたり。

四。動詞形容詞助動詞の語形及び連結を説くには、模範たるべき口語の形をも併説せり。編者は、國語教育の實際に省みて、口語の法格をも或程度までは授くるを必要とし、この點に關しては、從來の文法教科書の内容に飽かず思へる節あるなり。

五。助動詞の意義に關しては、相及び時をあらはすに必要なるものは特に詳説したれど、その他は概して省略に従へり。これ法格の深く論ずべきものなきにより。

(三) 第三篇には専ら文章の法格を説きたり。

一。編者は一部の文典の中にて最も文章篇を重要視するものなり。蓋し文章の法格を知らざれば、正確におのれの思想を述べ、他の思想を解すること能はざればなり。國語の文章法には、解決未了の問題少からざること、事實なり。さればとて、これを措いて論せざらんには、折角の文章篇は、内容空虚となりて、教科の價值乏しきものとなり了らん。編者はこゝに省みる所ありて、法格を説明するに便利なる文法上の約束は、便宜上これを採用せり。

二。文章の法格は、これを文章の解剖に應用すると共に、文章の組立にも應用せずば、學習の效果の一半は空しかるべき理なり。本書は最もこゝに留意し、文章の成分として首に連語の構造を説くこと、稍詳密なり。

三。本書は所謂客語と補語との別を立てず、便宜上通じてこれを客語とせり。

四。連語と句との差別は、單文と複文との分るゝ標準なれば、特に詳説せり。

- (四) 本書は所謂「許容事項」を本文中に説明し、これに關係ある正誤問題を故らに省略して、學ぶ者の思想の混亂を防ぎたり。
- (五) 練習用の例題は、この種の教科の重要なる位置を占むるものにて、その適否は直に教授の死活に關す。されば編者はこれが選擇に最も心を苦しめ、練習上の効果を確實に收得せしめんがために、内容の充實を圖り、また材料を多くは現行の國語讀本中の文章に求めて、應用の一斑を示せり。
- (六) 或まとまりたる事項を授け終へたる後には、必ず簡明なる表解を附して、既得の知識の概括整理の料に供せり。
- (七) 附録として假名遣大要一篇を載せたり。これを教科に充つるには、普通教育「國語綴字法」を参考せられんことを望む。

大正元年八月

目次

總說

第一篇

第一章	單語	三
第二章	名詞	四
第三章	代名詞	八
第四章	動詞	一〇
第五章	形容詞	一三
第六章	助動詞	一四
第七章	副詞	一七
第八章	助詞	二〇
第九章	接續詞	二三

第十章 感動詞……………二四

第二篇

第一章 體言 用言……………二七

第二章 動詞の活用その一……………二九

第三章 動詞の活用その二……………三五

第四章 動詞の活用その三……………三九

第五章 動詞の活用その四……………四三

第六章 動詞の活用その五……………四七

第七章 形容詞の活用……………五〇

第八章 助動詞の活用……………五三

第九章 動詞の語形の類別……………五七

第十章 形容詞の語形の類別……………六〇

第十一章 助動詞の語形の類別……………六三

第十二章 助動詞の連結その一……………六六

第十三章 助動詞の連結その二……………六九

第十四章 動詞の性……………七二

第十五章 動詞の相……………七五

第十六章 動詞の時……………七八

第十七章 助詞の承接……………八一

第十八章 品詞の轉成……………八四

第十九章 單語の構造……………八七

第三篇

第一章 連語 文……………九〇

第二章 連語の構造……………九三

第三章 單文の成立 一四

第四章 文の客語 一三

第五章 文主 一七

第六章 文の修飾語 一五

第七章 單文の解剖 一八〇

第八章 句 複文 一八三

第九章 節 重文 一四

第十章 文の要素の省略及び倒置 一〇一

第十一章 文の四體 結法 一〇六

附 録

假名遣大要

新定 教科 日本文典

文學博士 新村 出 編

總 說

一言語、文字、文章。人の音聲の意味あるものを言語といひ、言語を物に書きつくる符を文字といふ。また文字をつらねて思想をあらはしたるものを文章といふ。

國語。言語には日本語、支那語、英語、獨逸語、佛蘭西語などあり、文字にも假名、漢字、ローマ字などありて、世界の國々にて用ゐる言語、文字は一様ならず。わが國語は即ち日本語にて、これを寫すには、おもに假名と漢字とを用ゐる。

總 說

目的
 一、己の文章を作り出さるる爲
 二、他人の文章を正解する爲

音 語 文

字音 (片假名、平假名、カタカナ、ヘラカテ、ローマ字)

字意 (漢字)

文字 (漢字、片假名、平假名、カタカナ、ヘラカテ、ローマ字)

すものをつらねる思想を表すもの

三 **口語、文語。** わが國語は、時代によりて昔より少しづつ、變れり。今日、談話に用ゐる言語は、八九百年前より文章に用ゐられる言語と異なるところありて、例へば

山がある、

山あり、

美しい花、

美しき花、

今から行かう、

今より行かん、

などの如し。談話に用ゐる言語を口語といひ、文章に用ゐられる言語を文語といふ。

四 **文法。** 言語を用ゐるには、定まれる法則あり、これを文法といふ。文法によらざれば、正しくおのれの意味をあらはし、思想を述ぶることを得ず。されば、わが國語の文法は、わが國民たるものの必ず修むべき學科の一つなりとす。

第一篇

第一章 單語

一 **單語。** 文法にては、一つ一つの意味をあらはす言語を單語といふ。例へば

「櫻の花が咲く。」

といふ文章は、五つの單語にて成り、また

「生徒は皆新しき本を持ちたり。」

といふ文章は、八つの單語にて成れり。

二 **單語の種類。** 單語には種々あり。わが國語にては、そのあらはす意味の上より或は形の上より、これを次の九つの種類に分つ。

名詞 代名詞 動詞 形容詞 助動詞

副詞 助詞 接續詞 感動詞

この一つくを品詞といふ。さればわが國語はこれらの九品詞にて成れるものと知るべし。

▲言語—單語—品詞
名詞、代名詞、動詞、形容詞、助動詞、
副詞、助詞、接續詞、感動詞

第二章 名詞

事物の名をあらはす單語。

東郷大將はロシヤの艦隊を日本海で破つた。
今日のボートの競漕には、白が多く勝ちたり。
學を修め、業を習ひ、智能を啓發し、徳器を成就す。

名詞運意の點、
固有名詞、
皆普通名詞に入ら
し。

數名詞

二、三、四、五、右の例のうちにて、

東郷大將、ロシヤ、艦隊、日本海、
今日、ボート、競漕、白、
學、業、智能、徳器

四

名詞。單語のうちにて、事物の名をあらはすものを、すべて名詞といふ。前にいへる東郷大將、ロシヤ、艦隊、日本海、今日、

ボート、競漕、白、學、業、智能、徳器などは、即ち名詞なり。

五

表數名詞。例へば

「五つならぶうちの二つめのが、色が美しい。」
「第二の間に答へたる生徒は三人なり。」
といふ文章のうちにて、五つ、二つめ、第二、三人は、いづれも名

詞にて、事物の數量の名または順序の名をあらはすものなり。かやうの名詞を特に表數名詞といふ。

六 前の例にて、三人はたゞ人の數をあらはせるまでにて、三つといふに同じけれど、例へば

「三人行けば、必ずわが師あり。」

といふ文章にては、三人は「三つの人」といふ意味なれば、上の三は表數名詞にて、下の人は通常の名詞なり。同じく、

「本一冊、筆二本、馬三頭、鳥數羽、車幾百輛」

などの一冊二本三頭數羽幾百輛は、皆表數名詞なれど、

「茶一斤、長さ二里、維新の三傑、待つこと數日、

價幾百圓」

などにては、一、二、三、數、幾百といふ表數名詞は、斤、里、傑、日、圓と

いふ通常の名詞と複合して、一つの單語となれり。かやうに幾つかの單語の複合して成れるものを、熟語といひ、表數名詞は通常の名詞と熟語を成すこと多し。

例題

次の文章のうちより名詞をぬき出し、表數名詞なるは特にこれをいへ。

- 一。郵便切手二枚と靴足袋一足と林檎三個とを買つて、金五拾錢を拂つた。
- 二。長さ日の暮れそめては、二つ三つ五つ六つ、星の影漸く水の面に數まさりゆく。
- 三。學問の要は活用にあり。
- 四。健康はまことに貴い寶である。
- 五。平原十里麥は綠に、菜種は黄なり。
- 六。黄金の鎌の如き三日月は高く鋭く光を放てり。

七。大阪はわが國第一の商業地にて、鐵道四方に通じ、運河縱横に開けたり。

八。明治三十七八年戰役に、大山元帥はクロパトキンの率ゐる大軍を大いに奉天に破れり。

九。ベルリンの凱旋路の一端に高さ數十丈の凱旋塔あり。

第三章 代名詞

七 事物の名の代に用ゐる單語。

これはわたくしの本です。

それはあなたの筆です。

こゝにあるは何か。

かの日、君はいづこに行きたるか。

わが村はかしの山のこなたにあり。

右の例のうちにて、

これ、わたくし、

それ、あなた、

こゝ、何、

か、君、いづこ、

わ、かしこ、こなた

は、いづれも事物をさして、その名をいふ代に用ゐたる單語なり。

八 代名詞。

單語のうちにて、事物をさしてその名をいふ代に用ゐるものを、すべて代名詞といふ。前にいへるこれ、わたくし、それ、あなた、こゝ、何か、君、いづこ、わ、かしこ、こなたなどは、即ち代名詞なり。

例題

次の文章のうちより代名詞をぬき出せ。

- 一。お前はあちらへ行つて遊べ。
- 二。小生もかねてより貴兄の御高名承り居り候。
- 三。これ誰れの罪ぞや。
- 四。吾永く汝の諫を忘れじ。
- 五。山邊を見るに、櫻はこゝかしこに咲き亂れたり。
- 六。この説を聞く人、いづれもかれの博學に服せり。
- 七。こはおのれの知れることにはあらず。
- 八。子は足下の言によりて、これらの事實を知りたり。
- 九。御身等よ。死に至るまでその職分を忘れずとは、何たる美しき道德ぞ、また何たる雄々しき振舞ぞ。

第四章 動詞

事物の動作または存在をあらはす單語。

本を買ふ 客は朝から來て、店に集る。

雨と注ぐ 彈丸の間を突進する 一人の勇士あり。

右の例のうちにて、

買ふ、來、集る、

注ぐ、突進する

は、いづれも事物の動作をあらはす單語にて、また

あり

は、事物の存在をあらはす單語なり。

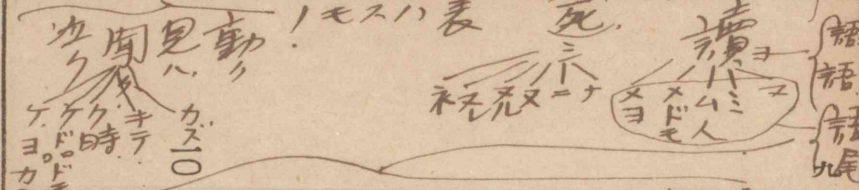
動詞。單語のうちにて、事物の動作または存在をあらはす

ものを、動詞といふ。前にいへる買ふ、來、集る、注ぐ、突進する、

ありなどは、即ち動詞なり。

注用ス 第四章 動詞 話尾 変化ヲ云フ、

Handwritten notes at the top of the left page, including characters like 美(2), 咲(1), and 雨(3), along with various annotations and diagrams.



動詞用サ
カク
ハク

654921
ハ
カ
ク
ケ
コ
ク
ケ
コ
ク
ケ
コ

段
目
イ
カ
キ
ク
ケ
コ
カ
キ
ク
ケ
コ

例題

次の文章のうちより動詞をぬき出せ。

- 一。雨が降る前には、必ずこの山に雲がかかる。
- 二。何を得るのも親の手からするのは、嬉しいものである。
- 三。將士は帽を舉げ、手巾を振りて、萬歳を連呼したり。
- 四。朋友は互に徳を磨きて、その過を正すべし。
- 五。君の民を恵み、民の君を敬ふこと、優れたり。
- 六。神と尊び、神と畏れ、親と頼み、親と睦ぶ。
- 七。絶頂は尖りて、僅なる地面に天の逆錚あり。
- 八。高く低く群れ飛ぶ鷗落花の風に飄るに似たり。
- 九。この間に種々の機會に遭遇して、かれが眞の伎倆は世にあらはれ、遂に鑛山主の信用を博するに至れり。
- 一〇。心こゝにあらざれば、視れども見えず、聽けども聞えず、食へどもその味を知らず。

第五章 形容詞

二 事物の有様をあらはす單語。

美しい花が多い。

わが國は、土地狭ければ、河の長きもの少し。

右の例のうちにて、

美しい、多い、狭けれ、長き、少し

はいづれも事物の有様をあらはす單語なり。

三 形容詞。單語のうちにて、事物の有様をあらはすものを、形容詞といふ。

前にいへる美しい、多い、狭けれ、長き、少しなどは、即ち形容詞なり。

例題

次の文章のうちより形容詞をぬき出せ。

- 一。海邊は空氣が清く、冬も暖い。
- 二。新しい方は、値が高く、物がよろしい。
- 三。牛は、歩むこと遅けれども、力強し。
- 四。委しきことは、近きうちにまたく、申し上ぐべく候。
- 五。その質の堅く重きを見れば、石なるか。
- 六。砂白く、水青き處を、一直線に矢の如く突き進む。
- 七。年わかくして、才のみ優れたるは、譬へば鋭き刀の肉薄きが如し。
- 八。旅して口惜しきは、わが財をもつことの少きよりも、わが學を積めることのまだしきにあり。

第六章 助動詞

三 動詞を助けて種々の意味をあらはす單語。

花咲かす。 花が咲かぬ。

花咲きたり。 花が咲いた。

花咲くべし。

右の例のうちにて、

す、ぬ

は、咲くといふ動詞を助けて打消す意味をあらはす單語、

たり、た

は、同じく、動作の完了したる意味をあらはす單語、

べし

は、同じく、推量する意味をあらはす單語なり。

四 助動詞。單語のうちにて、動詞を助けて種々の意味をあら

はすものを助動詞といふ。前にいへるずぬたりたべしなどは、即ち助動詞なり。

二五 助動詞のうちには、動詞の下につきてこれを助くるが如くに、名詞または代名詞の下に用ゐらるゝものあり。

正成は忠臣なり。

君は文部大臣たり。

二六 また助動詞は、いくつも重ねて用ゐらるゝことあり。

花咲きたるべし。

花咲くべきなり。

花咲きたるなるべし。

例題

次の文章のうちより助動詞をぬき出せ。

- 一。余がこの地に遊びしは、六月の下旬なり。
- 二。麥稈眞田の編方は西洋より傳へたるものなり。
- 三。奇樹異草、名も知らず、目なれぬもの、いと多し。
- 四。農民は豪族に苦役せられ、苛税に泣くに至りたり。
- 五。先生にいひつけられた文章を作らう。
- 六。僕も請待されたが、行かれなかつた。
- 七。父はわれをして伯父のもとを訪はしめき。
- 八。夕立至るべけれど、程なくはれん。
- 九。公は、領内の山々には杉苗を植ゑさせ、また始めて紙をすかせられたり。
- 一〇。われらはわが学校の生徒たる名を辱めざるやう、勉めざるべからず。

第七章 副詞

一七 動詞形容詞を修飾する單語。

水が急に流れる。

山甚だ高し。

最も劇しい戦があつて、要塞は遂に陥落した。

かつて遊びし地なれば、見るもの皆懐し。

右の例のうちにて

急に は「流れる」に、

甚だ は「高し」に、

最も は「劇しい」に、 遂に は「陥落し」に、

かつて は「遊び」に、 皆 は「懐し」に

副ひて、これらの動詞または形容詞を修飾する單語なり。

一八 副詞。單語のうちにて、動詞または形容詞に副ひてこれを

修飾するものをすべて副詞といふ。前にいへる急に甚だ、最も遂に、かつて、皆などは、即ち副詞なり。

一九 副詞には、他の副詞に副ひて、これを修飾するものあり。

水がよほど急に流れる。

見るもの殆ど皆懐し。

例題

次の文章のうちより副詞をぬき出せ。

- 一。互に馬を乗り放ち、既に槍を合はせんとしけり。
- 二。土人は俄に敬慕の念を起し、懇に墓前に禮拜せり。
- 三。わが軍なほ堅く忍びて、一發も應砲せず。
- 四。辯士は悠然と演壇に登つて、徐に説き出した。
- 五。その頃までは、土地がまだよく開けなかつた。
- 六。西南は山嶽相連なれども、東北は地勢概ね平になれり。

- 八。ひとり英國のみは、孤立を守りて、敢へて屈せず。
- 九。主人は極めてうちとけたる様にて、面白げに談笑せり。

第八章 助詞

三 單語と單語との關係をあらはす單語。

正成は教訓を正行に遺した。

左へ行けば、わが校の前に出づべし。

右の例のうちにて、

は、を、に、

へ、ば、が、の、に

は、いづれも上なる單語に附きて、これを助けて他の單語との關係をあらはす單語なり。

三

助詞。單語のうちにて、上なる單語に附きて、これを助けて、

他の單語との關係をあらはすものを、助詞といふ。前にいへるは、を、に、へ、ば、が、の、などは、即ち助詞なり。

三

助詞には、また上なる單語に附きて、これを助けて種々の意味をあらはすものあり。

これを何と讀むか。

さる事實ありや。

時は金なるぞ。

宜なるかな。

例題

次の文章のうちより助詞をぬき出せ。

- 一。師さへ勧め給へば、わが志今は決せり。

- 二。この理を知らざるを至愚といふ。
- 三。月の表面には、たゞ低地と山とあるのみ。
- 四。その意氣のいかに猛烈なりしかを見よ。
- 五。あの話は幾度か聞いたが、いつも涙がこぼれる。
- 六。友から聞くと、成程と思はれるではないか。
- 七。氣候は寒けれども、健康には障なしとぞ。
- 八。衣服を更めしは、先生を敬する爲にてありけるよ。
- 九。これより絶頂までは、道の程いかほどかある。
- 一〇。かれが旅行を快樂の一つに數ふるも、宜ならずや。

第九章 接續詞

三 言語を接續する單語。

汽車は驛また驛を過ぎて行く。

會員は文を修め且武を練る。

寒氣強し、されど士氣旺盛なり。

右の例のうちにて、

また は「驛」と「驛」との、

且 は「文を修め」と「武を練る」との、

されど は「寒氣強し」と「士氣旺盛なり」との

間にありて、これらの言語を接續する單語なり。

二 接續詞。單語のうちにて、言語の間にありて、これを接續す

るものを、接續詞といふ。前にいへるまた、且、されどなどは、

即ち接續詞なり。

例題

次の文章のうちより接續詞をぬき出して、これを説明せよ。

- 一。生絲及び茶は、わが國の名高き輸出品なり。
- 二。受験者は羽織袴または洋服を著用すべし。
- 三。空は快く晴れ、それに波さへ穩であつた。
- 四。花には、色の美しきもの或は香の高きものあり。
- 五。生徒は父兄或は保證人の家より通學するか、もしくは寄宿舎に入るべし。

第十章 感動詞

三 感動に發する單語。

やあ どうした。
 あゝ 楽しいかな。
 右の例のうちにて、
 やあ、

あゝ

は、共に感動に發する單語なり。

三 感動詞。單語のうちにて、感動に發するものを、感動詞といふ。前にいへるやあ、あゝなどは即ち感動詞なり。

例題

次の文章を一つ一つの單語に分ちて、その品詞の名をいへ。

- 一。巧なる詐は拙き誠にしかず。
- 二。ドイツは學理を實地に應用すること最も巧なり。
- 三。汽罐車の發明は殆ど人間の生活状態を一變させた。
- 四。町といへば町、しかし戸數は千にも足らない。
- 五。無學にして旅するはたとへば夜行くが如し。
- 六。山常に鳴動して、地軸今にも碎けんかと思はる。

- 七。風雨にさらされて、鼻目しかとは見え分かず、
- 八。農業は、人をして美趣を解し、詩情を養はしむ。
- 九。全軍の將士、休養すでに足りて、元氣鬱勃たり、
- 一〇。あゝ、この一語遂に最後の別辭となれるか。

第二篇

第一章 體言 用言

一 體言、用言。名詞と代名詞とは、事物の名をいひ、またはその名の代に用ゐられ、動詞と形容詞とは、事物の動作、存在または有様をいふ。名詞と代名詞とを總稱して體言といひ、動詞と形容詞とを總稱して用言といふ。

二 用言の活用。用言は、用方によりて、その語の形を變ず。

流る。 水流る。 水流れず。 流るゝ、水清し。

水急に流るれば、舟通はず。

高し。 山高し。 高き山聳ゆ。 山高く、谷深し。

山高けれど、けはしからず。

即ち動詞流るは、流る、流れ、流るゝ、流るれとやうに、その語形を變じ、形容詞高しは、高し、高き、高く、高けれとやうに、その語形を變ず。かやうの用言の語形變化をその活用といふ。活用には種々あり、形容詞と動詞とはその活用の狀異なり。

▲名詞 體言
代名詞 動詞 用言 活用
形容詞

例題

次の文章のうちより體言と用言とをぬき出し、更にそれが名詞か代名詞か、または動詞か形容詞かをいへ。

- 一。立つ鳥跡を濁さず。
- 二。梅檀は二葉より芳し。
- 三。君が行くときには、僕等も行かう。
- 四。食堂は廣さ百疊をも敷くべし。

一、見
一、著

- 五。頂より白き煙四時に立ちのぼる。
- 六。懐しき富士の高嶺舟人を迎へて、白雲を出でたり。
- 七。皇國の興廢この一戦にあり。
- 八。敵の司令官は白旗を掲げ、四隻を率ゐて降伏した。
- 九。そを見つけたるときのうれしさ、何にか譬へん。
- 一〇。蟲の音しげき草を踏めば、月影爪先に散りゆく。露のこぼるゝなり。

第二章 動詞の活用 その一

三

四段活用。動詞の活用の、五十音圖の同行のア列、イ列、ウ列、

エ列の四段に互るものを、四段活用といふ。

四段活用をなす動詞は甚だ多し。左にそのカ行とハ行とラ行とに活用するものの例を示す。

行く。ゆ か き く け こ
 買ふ。か は ひ ふ へ ほ
 知る。し ら り る れ ろ

文語にて四段活用をなす動詞は、口語にてもまた四段活用をなし、その語形全く相同じ。

四

良行變格活用

ありといふ動詞は、また五十音圖のラ行の
 ア列、イ列、ウ列、エ列の四段に互りて活用す。

あり。 あ ら り る れ ろ

されど、通常の四段活用の動詞と異なり、言ひきるにウ列の音を用ゐずして、イ列の音を用ゐること、例へば、左の如し。

知る(四段活用) かれを知り、おのれを知る。
 あり。 陸に車あり、海に舟あり。

されば、通常の四段活用と別ちて、ありの如き活用を良行變格活用といふ。

良行變格活用をなす動詞は、ありの外に、居り、侍りの二つあるのみ。

五

口語の動詞には、良行變格活用をなすものなし。文語の良行變格活用の動詞は、口語にては通常の四段活用をなす。

ある。 陸に車があり、海に舟がある。

居りは、今は文語にても遷りて居るとなり、全く四段活用の動詞として用ゐらる。

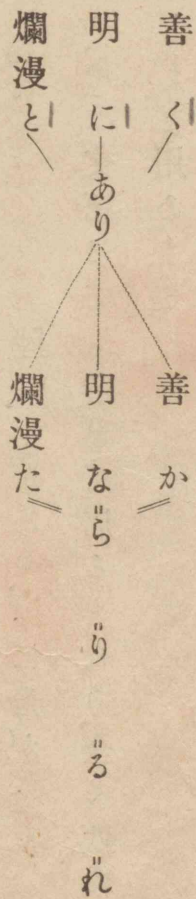
居る。 父ロンドンに居り、兄北京に居る。

六

形容動詞

善く、悪しくなど、(に)に終る副詞、明に、遙になど、(に)に終る副詞、爛漫と、洋々となど、(と)に終る副詞が、その

下、直に動詞ありに副ひて、これを修飾するときは、これと複合して、善かり、悪しかり、明なり、遙なり、爛漫たり、洋々たりなどいふ熟語となり、また良行變格活用をなす。



かやうの熟語を形容動詞と名づけ、動詞の一種と見る。

七

奈行變格活用。

死ぬといふ動詞は、五十音圖のナ行のア列、イ列、ウ列、エ列の四段に互りて活用する外に、なほウ列の音にとれとの添ひたるものにも活用す。

死ぬ。 し な に ぬ ぬる ぬれ

ぬる ぬね の

かやうの活用を奈行變格活用といふ。

奈行變格活用をなす動詞は、死ぬの外に、たゞ往ぬの一語あるのみ。

八

口語の動詞には、奈行變格活用をなすものなし。文語の奈行變格活用の動詞は、口語にては、ぬるはぬとなり、ぬれはねとなりて、通常の四段活用をなす。

(文語の活用の例)

死ぬ。 死ぬる人。

死ぬれば。

(口語の活用の例)

死ぬ。 死ぬ人。

死ねば。

文語にても、今は死ぬを通常の四段活用として用ゐる。

九

四段活用の動詞の見分け方。 四段活用、良行變格活用、奈行

變格活用の動詞は、その下ずといふ語に連なるには、

行く 行か
行く 行か
行く 行か

行か
買はす
知ら
あらす
死なす

とやうに、皆ア列の音よりす。されば、かやうの連続をなすものは、前にいへる良行變格活用奈行變格活用の動詞數語の外、すべて四段活用の動詞なることを知べし。



例題

一。次の動詞の活用を記せ。

書く。騒ぐ。貸す。勝つ。
いふ。飛ぶ。読む。賣る。

二。四段活用の動詞八つを挙げよ。
三。形容動詞六つを挙げよ。

第三章 動詞の活用 その二

一。上一段活用。動詞の活用の、五十音圖の同行のイ列の一段

とこの列の音にるとれとの添ひたるものとに互るものを、上一段活用といふ。左にカ行及びハ行の上一段活用をなす動詞の例を示す。

著る	か	き	こ
干る。	は	き	こ
	ひひ	き	こ
	ひれる	き	こ
	ふ	く	け
	へ	け	こ
	ほ	こ	こ

二 普通の文語の上二段活用の動詞は左の十三語のみなり。

- 射る。 鑿る。 著る。 煮る。 似る。
- 干る。 見る。 惟みる。 顧みる。 鑑みる。
- 居る。 率ある。 用ある。

文語にて上一段活用をなす動詞は、口語にてもまた上一段活用をなし、その語形全く相同じ。

三 上二段活用。 動詞の活用の、五十音圖の同行のイ列、ウ列の

二段となほウ列の音にとれとの添ひたるものとに互るものを、上二段活用といふ。 左にカ行及びハ行の上二段活用をなす動詞の例を示す。

- 起く。 おかき
- くぐる。 くれ
- け
- こ

- 強ふ。 しはひ
- ふ
- へ
- ほ

ふる くれ

三 口語の動詞には、上二段活用をなすものなし。 文語の上二段活用の動詞は、口語にては、遷りて上一段活用をなす。

- 起きる。 おかき
- き
- く
- け
- こ

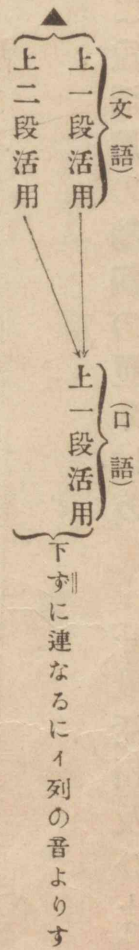
- 強ひる。 しはひ
- ひる
- ふ
- へ
- ほ

四 上二段活用の動詞の見分け方。 上一段活用及び上二段活用の動詞は、その下、ずといふ語に連なるには、

- き(著) 起き
- ひ(手) ず
- 強ひ

Handwritten notes at the top of the page, including characters like '起', '強', 'か', 'す', 'け', 'こ', 'ひ', 'は', 'へ', 'ほ' and some arrows.

とやうに、皆イ列の音よりす。されば、かやうの連続をなすものは、前にいへる上一段活用の動詞十三語の外、普通には上二段活用の動詞なることを知るべし。



例題

- 一。次の動詞の活用を記せ。
射る。似る。見る。居る。用ゐる。
- 二。次の動詞の活用を記せ。
生く。落つ。延ぶ。老ゆ。懲る。
- 三。前題の五動詞の口語の活用を記せ。
- 四。上二段活用の動詞三つを挙げよ。

第四章 動詞の活用 その三

五 下一段活用。動詞の活用の、五十音圖の同行のエ列の一段と、この列の音にるとれとの添ひたるものとに互るものを、下一段活用といふ。この活用をなす動詞は、文語には、たゞ蹴るの一語あるのみ。即ち

蹴る。 か き く こ

けける
けれ

この語は、口語にてもまた下一段活用をなし、その語形全く同じ。

六 下二段活用。動詞の活用の、五十音圖の同行のウ列、エ列の二段と、なほウ列の音にるとれとの添ひたるものとに互る

ものを、下二段活用といふ。左にカ行及びハ行の下二段活用をなす動詞の例を示す。

受く。 う か き く け こ

變ふ。 か は ひ ふ へ ほ

くる
くれ

一七 口語の動詞には、下二段活用をなすものなし。文語の下二段活用

の動詞は、口語にては、遷りて下一段活用をなす。

受ける。 う か き く け こ

變へる。 か は ひ ふ へ ほ

ける
けれ

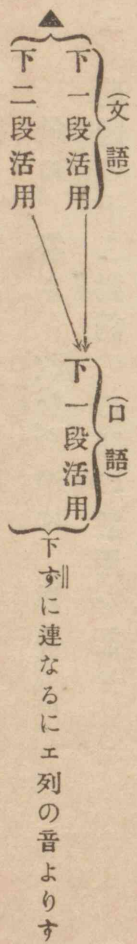
へる
へれ

一八 下二段活用の動詞の見分け方。下一段活用及び下二段活

用の動詞は、その下ずといふ語に連なるには、

受く 受ける
け 蹴す 蹴す

とやうに、皆エ列の音よりす。されば、かやうの連続をなすものは、前にいへる下一段活用の動詞蹴る及び後にいふ左行變格活用の動詞すの外、すべて下二段活用の動詞なることを知るべし。



例題

- 一。次の動詞の活用を記せ。
得。助く。告ぐ。載す。捨つ。出づ。
兼ね。答ふ。改む。消ゆ。隠る。植う。
- 二。前題の十二動詞の口語の活用を記せ。
- 三。下二段活用の動詞五つを挙げよ。
- 四。次の動詞が何活用のものなるかをいへ。
召す。笑ふ。任す。悔ゆ。覺ゆ。下る。枯る。

第五章 動詞の活用 その四

一九 左行變格活用。すといふ動詞は、五十音圖のサ行のしすせの三段とすにるれの添ひたるものとに互りて活用す。

す	し	す	せ	そ
すれ	すれ	すれ	すれ	すれ

この活用を左行變格活用といふ。この活用をなす動詞は、本來たすの一語あるのみなり。

口語にては、すはするとなりて、その活用の状稍異なり。
する。 [さ] し [す] せ [そ]

二〇 熟語の左行變格活用の動詞。名詞はすと複合して、熟語の動詞となり、また左行變格活用をなす。

心す。 欲す。 取引す。 議す。 製造す。

二 すが熟語の動詞となるとき、發音の便によりて、濁音ずに變ずることあり。

論ず。 生ず。 重んず。 安んず。

かやうの場合に原音を濁音に變ずることを、連濁といふ。

三

加行變格活用

來といふ動詞は、五十音圖の力行のきくこの三段とくにるれの添ひたるものと互りて活用す。

來。

か

き

くる

け

こ

この活用を加行變格活用といふ。來の外には、この活用をなすものなし。

口語にては、來は來るとなりて、その活用の狀稍異なり。

來る。

か

き

くる

け

こ

(文語)

(口語)

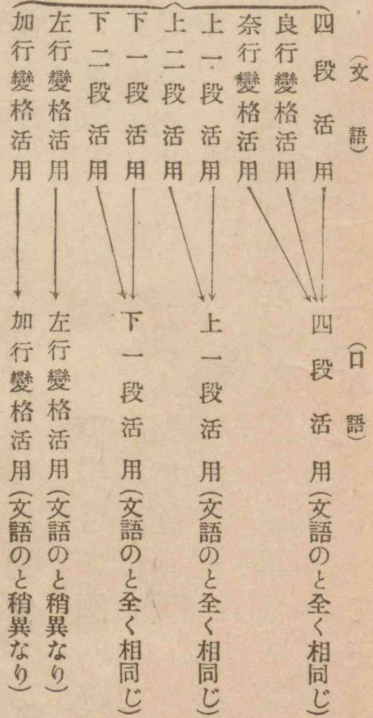
左行變格活用

左行變格活用(文語のと稍異なり)

加行變格活用

加行變格活用(文語のと稍異なり)

▲ 動詞の活用の類別



例題

次の動詞の活用を記せ。

- 一。流す。流る。居り。問ふ。與ふ。閉づ。輕んず。
- 二。敵は一方に血路を求めて、遁げようとした。
- 三。かれは嚴に自制を加へて、終に溫厚の長者となれり。
- 四。部屋に居て、經を誦んじ、詩を吟ずるもあり。

- 五。過ぐる者は送るが如く、来る者は迎ふるに似たり。
- 六。犬は忽ち嬉しげに吠えて、その肩に飛びつき、その足にまつはり、はては頭を舐り、手を嘗めなどする。
- 七。石の扉も、人の手に碎かば、などか破れざらん。鐵の柱も、人の手に挫かば、などか折れざらん。

第六章 動詞の活用 その五

三 動詞の送假名 動詞を漢字にてあらはすには、通常、その語

形の變化する部分より假名を送る。この場合に、例へば

買はず、 買ひ、老い、用ゐ、 買ふ、報ゆ、植う、
ワ イ イ ウ フ ユ

堪へ、絶え、植ゑ、 恥ぢ、 恥づ
エ エ エ ジ ズ

とやうに、用ゐる假名の相紛るゝことあり。すべて正しき

二

假名を用ゐる分くる法を假名遣といふ。動詞の假名遣の通則。動詞の語形の變化する部分を寫すに用ゐる假名の相紛るゝものは、次の二種なり。

(種一第)		(ア行)		(ア行)
(ハ行)	(ヤ行)	わ	=は	
		ゐ	=い=ひ=い	
		う	=ゆ=ふ=う	
		ゑ	=え=へ=え	
(種二第)		(サ行)		(タ行)
		ぢ	=じ	
		づ	=ず	

さて、

(一) 動詞の五十音圖の ア行 に活用するものは、

- い(射る)、い(鑄る) (上一段活用)
- う(得) (下二段活用)

ヤ行 に活用するものは、

老い、悔い、報い (上二段活用)

癒ゆ、覺ゆ、消ゆ、聞ゆ

越ゆ、肥ゆ、榮ゆ、聳ゆ、絶ゆ

生ゆ、冷ゆ、殖ゆ、吼ゆ、見まゆ

見ゆ、燃ゆ、萌ゆ (下二段活用)

ワ行に活用するものは、

ゐ居る、率ゐる、用ゐる (上一段活用)

植う、飢う、据う (下二段活用)

の諸語なれば、第一種の相紛るゝ假名を用ゐる動詞は、これらの諸語を除きては、大抵ハ行に活用するものとなるべし。

次にサ行の濁音に活用する動詞は、連濁によりてずと

なる左行變格活用の「ず」と下二段活用の「混ず」とのみなれば、第二種の相紛るゝ假名を用ゐる動詞は、これらの外は、タ行の濁音に活用するものと知るべし。

(二) 動詞はすべて五十音圖の同行にのみ活用す。さればある動詞の活用の一つの語形を知るときは、他の語形の假名遣に誤なきことを得。例へば「強ひ」がハ行に活用することを知れば、「強ゆ」は「強ふ」の誤なること明に、「老ゆ」がヤ行に活用することを知れば、「老ひて」は「老いて」の誤なること明なるが如し。

二五 また「ささ」支ふ、「こた」答ふなどは、「さソふ」、「こトふ」などと呼びて、「さそ」誘ふ、「いと」厭ふなどと假名遣の相紛るゝことあり。かやうの場合にも、その動詞の活用の他の語形より判じて、容

易にその假名遣を知ることを得べし。即ち

さ	さ	支	へ	ふ	こた	答	へ	ふ
さ	そ	誘	へ	ふ	いと	厭	へ	ふ

三 動詞の音便。發音の便によりて、原音を他の音に變じ、假名

をも書きかふることあり。これを音便といふ。

さて、四段活用の動詞にては、例へば、

書きて、 漕ぎて

などとすべきを、そのきぎを共にいに變じて、

書いて、 漕いで

などとすることあり。これをイ音便といふ。

七 次に、四段活用の動詞にては、例へば、

請ひて、隨ひて

などとすべきを、そのひをうに變じて、

請うて、隨うて

などとすることあり。これをウ音便といふ。

三 また四段活用及び奈行變格活用の動詞にて、例へば、

飛びて、 進みて、 死にて

などとすべきを、そのびみにを皆んに變じて、

飛んで、 進んで、 死んで

などとすることあり。これをン音便といふ。

元 なほ、四段活用及び良行變格活用の動詞にて、例へば、

勝ちて、 隨ひて、 取りて、 ありて

などとすべきを、そのちひりを皆促る音に變じて、

勝つて、 隨つて、 取つて、 あつて

などとすることあり。これを促音便といふ。

三〇 口語の「書いた」「漕いだ」「請うた」「随うた」「飛んだ」「進んだ」「死んだ」「勝つた」「随つた」「取つた」「あつた」なども、皆音便なり。

▲動詞の假名遣

相紛る、假名
イ、ヒ、キ。ウ、フ、ユ。エ、ヘ、エ。ハ、ワ。ジ、ゼ。ズ、ヅ。
ア列の假名オ列の假名。

假名遣の通則
一、ア行に活用する動詞。ヤ行に活用する動詞。
二、動詞は五十音圖の同行に活用す

▲動詞の音便

キ、ギ、イ、イ音便……………四段活用
ヒ、ウ、ウ音便……………四段活用
ニ、ビ、ミ、ン、ン音便……………四段活用、奈行變格活用
チ、ヒ、リ、ツ、促音便……………四段活用、良行變格活用

例題

次の文章のうちより動詞をぬき出し、その何活用のものなるかをいへ。

- 一。都下の人口は年を逐うて増加す。
- 二。高風を仰いで、誓つて名を揚げ、身を立てん。
- 三。勇み立つたる人々は喜んで出發準備をなしたり。
- 四。小田原藩の家老に、破産に迫つたものがあつて、二宮尊徳の評判を聞いて、一家の整理を頼んだ。

次の文章のうちより動詞をぬき出し、その假名遣の誤れるものは正せ。

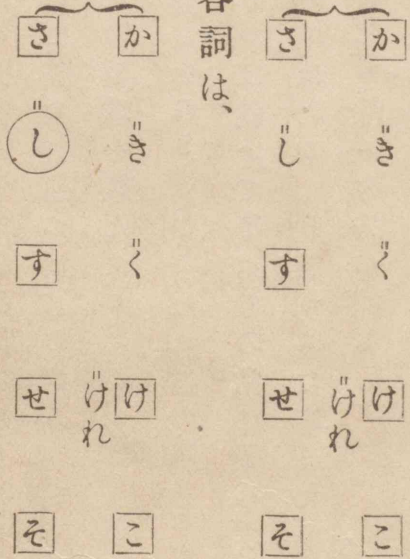
- 五。よく人を教えしかば就いて學ぶもの常に絶へず。
- 六。職工の皆樂しむではたらく状態するに堪えたり。
- 七。どこに行つても、潺々淙々の音が聞へる。
- 八。岩を攀じ、谷を越えて、頂に達し、思わず大呼す
- 九。決議を衆につとるに、異議をとのふるものあり。
- 一〇。陣地をと、なあるに先だちて、おさふて敵を破る。
- 一一。耳を掩ふた太郎作が、まだ半町と逃げ延びぬ中に、鳴る光る、降る、吹く、世の終かと思ふ程の暴れやう。

形容詞の活用 本件

第七章 形容詞の活用

三 形容詞の活用の状態。形容詞の活用は、たゞ一類あり。その状態動詞とは異にして、五十音圖の力行、サ行の二行に跨る。

善し。 よ
但し、悪しといふ形容詞は、



とやうに、そのまゝ「き」「く」「けれ」「し」に續く。この「し」に續く場合には、その「し」を略して、悪しとなるが常なり。

形容詞 = 作詞 = 添言 = 添詞
(大ナ意味) 形容詞 + 用言 = 添詞
大形容詞

形容詞 = 一類、形容詞、
一、副詞、
二、中止形、

三 形容詞のうちにて、美し、樂しなどの如く、そのまゝ下さに續きて、高さ、廣さなどいふ名詞を成すものは、その活用の趣、善しに同じ。かやうに形容詞を二種に分つことを得。

三 形容詞の送假名。形容詞を漢字にてあらはすにも、通常、その語形の變化する部分より假名を送る。

四 形容詞の音便。形容詞にも音便あり。例へば
惜しきかな、 年わかくして

などとすべきを、イ音便によりて、そのきをい、ウ音便によりて、くをうに變ずることあり。
惜しいかな、 年わかうして。

三 口語の形容詞の活用。口語にては、形容詞の語形の「きと

しとは、共に「い」となる。「くも」「う」となることあり。

高い。	たか	い	く(う)	けれ
楽しい。	たのし	い	く(う)	けれ

三 動詞と形容詞との別。動詞と形容詞とは、寧ろ形の上より

別たる。即ち五十音圖の同行にのみ活用するを動詞とし、そのカ行、サ行に跨りて活用するを形容詞とするなり。されば、意味の相對する言語にても、例へば「あり」は動詞にて、「なし」は形容詞、「富む」は動詞にて、「貧し」は形容詞、「老ゆ」は動詞にて、「わかし」は形容詞なりとす。

▲形容詞の活用の状
カ行、サ行に跨りて活用す「き、く、けれ、し」
形容詞の二類「善し」の類、「惡し」の類

▲形容詞の音便 イ音便
ウ音便

▲口語の形容詞の活用 「い、く(う)、けれ

▲動詞と形容詞との別
五十音圖の同行に活用す——動詞あり、富む、老ゆ、……
カ行、サ行に跨りて活用す——形容詞なし、貧し、わかし、……

例題

次の文章のうちより形容詞をぬき出して、その活用を記せ。

- 一。月清く、風涼し。
- 二。大きい竹藪に雨がかゝる有様は、面白い。
- 三。いかにも見處がなく、御恥づかしい次第だ。
- 四。小さい栓を捻れば、冷き水迸りいづ。
- 五。星の光うすく、かなたの森も淡くして、煙と見ゆ。
- 六。寒ければ、煖爐に火を焚き、暑ければ、扇風器を据う。
- 七。遠き慮なきときは、必ず近き憂あり。
- 八。品物多くして、買ふ人少きときは、品物の價低し。

助動詞

助動詞は動詞を助けてその自
身には主語は難き所を補ふ

助動詞は動詞を助けてその自
身には主語は難き所を補ふ
例 吾は雨降りたり。昨日は雨降りたり。

助動詞は動詞を助けてその自
身には主語は難き所を補ふ
例 吾は雨降りたり。昨日は雨降りたり。

助動詞は動詞を助けてその自
身には主語は難き所を補ふ
例 吾は雨降りたり。昨日は雨降りたり。

助動詞は動詞を助けてその自
身には主語は難き所を補ふ
例 吾は雨降りたり。昨日は雨降りたり。

助動詞は動詞を助けてその自
身には主語は難き所を補ふ
例 吾は雨降りたり。昨日は雨降りたり。

助動詞は動詞を助けてその自
身には主語は難き所を補ふ
例 吾は雨降りたり。昨日は雨降りたり。

九。 老いたるもわかきも、富めるも貧しきも、皆美しき花の下に遊
び暮して、樂しき一日を送らぬはなし。

赤き岸、白き渚あれば、黒き岩黄なる崖あり。

第八章 助動詞の活用

助動詞の活用は、動詞及び形容詞と同じく、用

格活用の如きもの、特殊のものなど、種々あり。

下二段活用の如き活用をなす助動詞。

動詞の如き活用を

なす助動詞には、その状の下二段活用の如きものと、良行變
格活用の如きものと、奈行變格活用の如きものとあり。

時

現在

過去

未来

完了

助動詞

例

花咲き

外国語を

習う

完了

助動詞

例

雨降りたり

書かしたむ

しむ

つ

つ

つ

現在

過去

未来

完了

助動詞

例

雨降りたり

書かしたむ

しむ

第八章 助動詞の活用

五

完助(ツ、タリ)

現在 = 動詞
過去 = ...
未未 = ...
現在 = ...
過去 = ...
未未 = ...

指定助動詞
例 向見ゆは船なり
五人は中世生なり

四 言はせる。 せ、 せる、 せれ。
教へさせる。 させ、 させる、 させれ。
なほ、口語には、別にされるといふ助動詞ありて、またこの類の活用をなす。
許可される。 され、 される、 され。

四 つは、口語には、そのてといふ語形のみ存す。ては動詞のイ音便、ン音便を承けて連濁にてでとなることあり。
防いで。

三 良行變格活用の如き活用をなす助動詞。
死んで、叫んで、進んで。
元勳たり。
書くなり。
た、 たり、 たる、 たれ。
なら、 なり、 なる、 なれ。

三 打消し助動詞
例 僕は東京に行くなり
オ、ざり、まじ
共に打消の時、用い

四 詠歎
なり、けり、助動
是、動詞終止形ニ結ビ、イテ、ワイナド、
感歎ナルモ、モ、衣ス、

三 これらのうちに、て、書きたり」のたりは、口語にてはたととなり、左の如き活用をなす。
書いた。 たら、 た、 たれ。
このたらた、たれも、連濁にてたらだ、だれとなることあり。
防いだらば、 死んだ、 叫んだれど。
書きたり。
書けり。
書きけり。
書かざり。
書くべかり。
た、 たり、 たる、 たれ。
ら、 り、 る、 れ。
け、 けり、 ける、 けれ。
ざ、 ざり、 ざる、 ざれ。
べ、 べかり、 べかる、 べかれ。

四 奈行變格活用の如き活用をなす助動詞。
行きぬ。
な、 に、 ぬ、 ぬる、 ぬれ、 ね。

助動詞のつづき

形容詞の如き活用をなす助動詞。

不愛身の助動詞
 (る、らる) (例) 祝子に死なす
 主人小僧に盗まけらる
 盗人に盗まされ
 伝かしまに長く居らる
 6. 尊敬助動詞
 敬者を表はすに用ふるもつてある
 益賊に盗まゆす
 父は御の末風御に御座り
 叔父は御の忠海を御座り
 主人は小僧に御座り
 女中と旦那様は皆金取に御座り
 早く上げ
 早く上げ(リ) 1. 力が衰へス
 早く上げ(リ) 1. 力が衰へス

書くべし。	べき、	べく、	べけれ	べし。
書くごとし。	ごとき、	ごとき、	ごときけれ	ごとし。
書くまじ。	まじき、	まじく、	まじけれ、	まじ。
書きたし。	たき、	たく、	たけれ、	たし。
右のまじは、口語にては、まいとなりて、たゞこの語形のみを	たい、	たく、	たけれ。	
存したしはたいとなりて、口語の形容詞の活用をなす。	書きたい。	書かない。	行くらしい。	
なほ口語には、別にない、らしいといふ助動詞ありて、また口	書かぬ。	書かぬ。	書かぬ。	
語の形容詞の活用をなす。	書かぬ。	書かぬ。	書かぬ。	

特殊の活用をなす助動詞。

陛下は日老より四返幸せり
 白雲天子殿下はる地をお覽せと先給ふ
 7. 使役の助動詞
 (す、さす、しむ) 全助動詞
 小僧を買物に行かむ
 毎日之時起きむ
 幹事は病氣に、代理をして下さる
 8. 可能助動詞(能は、Can)
 (ま、らる、し) 全助動詞
 吾は英語を讀まむ
 旅行するはなす
 近來斬球を蹴らる
 吾が腕力は多高男の表五
 万碎く

書かす。	す、	ぬ、	ぬ、	
書かむ。	む、	め、	め、	
書きけむ。	けむ、	けめ、	けめ、	
書くらむ。	らむ、	らめ、	らめ、	
書きき。	き、	し、	しか、	
右のずは、口語にては、ぬとなり、むはうまたはようとなる。	書かぬ。	書かう、	教へよう。	
また、む、けむ、らむをン音便にてん、けん、らんとすることあり。	口語のぬも、同じくんとすることあり。	なほ活用を闕きたる文語の助動詞じらしあり。	書かじ。	書くらし。

五

未然形。

下、助詞ばに接して、動作または存在を未だ然らざる意にいふに用ゐる語形を、未然形といふ。

行かば。

あらば。

死なば。

きば。

起きば。

けば。

受けば。

せば。

こば。

五

連用形。

下、用言即ち動詞、形容詞に連ねて、これと熟語を成さしむるに用ゐる語形を、連用形といふ。

行き過ぐ。

あり難し。

死にはつ。

きかふ。

起きいづ。

け仆す。

受け取る。

しおほす。

きあはす。

五

終止形。

その語にて文章を止むるに通常用ゐる語形を、終止形といふ。

人行く。

花あり。

鳥死ぬ。

友、裕をきる。

兒起く。

馬、人をける。

弟、賞を受く。

蟲の聲す。

客く。

口語にては、ありはありとなり、起くは起きとなり、受くは受けるとなり、すはするとなり、くはくるとなる。終止形を動詞の本體とす。文語にては、ありを除きて、その皆ウ列の音に終るを見るべし。

五

連體形。

下、體言即ち名詞、代名詞に連ぬるに用ゐる語形を、連體形といふ。

行く人。

野にある花。

死ぬる時。

給をきる友。 起くる兒。 人をける馬。 賞を受くる者。 聲する方。 常にくる客。

五 口語にては、この語形の死ぬるは死ぬとなり、起くるは起きるとなり、受くるは受けるとなる。されば、口語にては、諸活用を通じて、終止形と連體形との同じきを見るべし。 五 連體形は、またその下に連なるべき體言を略して用ゐることあり。

今咲く(花)は菊なり。

夙く起くる(こと)は養生によろし。

口語にては、これを「咲くのは」起くるのは「などいふ。

五 已然形。 下、助詞ばに接して、動作または存在を確定せる意にいふに用ゐる語形を、已然形といふ。

行けば。

あれば。

死ぬれば。

きれば。

起くれば。

ければ。

受くれば。

すれば。

くれば。

口語にては、死ぬれば死ぬとなり、起くれば起きればとなり、受くれば受ければとなる。

五 命令形。 動作または存在を命令する意をあらはすに用ゐる語形を、命令形といふ。

行け。

あれ。

死ね。

きよ。

起きよ。

けよ。

受けよ。

せよ。

こよ。

この語形は、四段活用、良行變格活用、奈行變格活用の外は、助詞よを伴ふものとす。

六 形容動詞の語形。形容動詞はその活用の状ありと同じけ

れば、またありと同じき六種の語形を具ふ。

善かり。

善か

(然未) (用連) (止終) (體連) (然已) (令命)

明なり。

明な

ら り り る れ れ

爛漫たり。

爛漫た

口語にては、連體形明なるを明なといふが常なり。

明な月。

六 動詞の誤用。終止形と連體形とは、その語形、四段活用、上一

段活用、下一段活用及び口語の左行變格活用、加行變格活用にては、相同じけれど、上二段活用、下二段活用、良行變格活用、奈行變格活用及び文語の左行變格活用、加行變格活用の諸

動詞にては、相異なり。されば兩語形の相異なるこれらの諸活用にては、この兩語形を用ゐる誤ることあり。

今年は花の綻ぶこと早し。

心あるものは、この寺の荒るを悲しめり。

これらは、綻ぶる荒るゝと正すべきなり。

▲動詞及び形容動詞の語形の類別

未然形(死なば) 連用形(死にはつ) 終止形(鳥死ぬ) 連體形(死ぬる時) 已然形(死ぬれば) 命令形(死ね)

例題

次の文章のうちより動詞及び形容動詞をぬき出して、語形を説明せよ。

- 一。子ほど親を思へ。
二。恩を受けば、必ず報いよ。

- 三。急がば、まはれ。
- 四。劇しい競争の起るのは、見易い道理である。
- 五。一日讀書すれば、一日の益あり。
- 六。沖を見わたせば、鯛釣る舟木の葉の如く浮かぶ。
- 七。世に中途に事を廢する例は數へつくし難し。
- 八。風雅のたしなみあるものは、自ら容認するを得。
- 九。結構の堅牢なる、觀望の壯麗なる、實に府下第一とす。
- 一〇。志だに堅からば、身の不遇を歎ずることなかれ。

次の様式に倣ひて、左の諸動詞の活用の表を作れ。

活用の種類	動詞	變化せぬ部分	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
四段活用	知る	し	ら	り	る	る	れ	れ
下一段活用	教へる	をし	へ	へ	へる	へる	へれ	へ

- 一。勝つ。落つ。見る。朽ちる。

- 二。捨てる。流る。與ふ。欲す。
- 三。居り。信ず。呼ぶ。來る。

次の文章のうちに、動詞の誤用あらば正して、これを説明せよ。

- 一四。出で迎ふ人停車場に満ちたり。
- 一五。兒どもの數多集りて、魚を捕ふを見る。
- 一六。この建議は、再議に附すこととなれり。
- 一七。國の亡ぶは、その民の元氣の衰ふによる。
- 一八。身方の軍鯨波をつくりて、逃さじとおひかくる。
- 一九。職を退きたる後、おとづる人常に絶えず。

第十章 形容詞の語形の類別

三 動詞との比較 形容詞の語形を動詞の語形と比ぶるに、左の如し。

(動詞)

(形容詞)

未然形

行かば

善くば

悪しくば

連用形

行き過ぐ

善くあり

悪しくあり

終止形體本

人行く

行善し

心悪し

連體形

行く人

善き行

悪しき心

已然形

行けば

善ければ

悪しければ

命令形

行け

三 形容詞の語形

されば、形容詞にも、未然、連用、終止、連體、已然の五語形ありて、たゞ命令の一語形の闕けたるを見るべし。但し、その連用形は、形容詞の轉じて副詞となる語形なり。口語にては、しときとの二つは、共にいとなるが故に、動詞の場合の如く、また終止形と連體形との差別なし。

▲形容詞の語形の類別

未然形善くば
連用形善くあり
終止形行善し
連體形善き行
已然形善ければ

例題

次の文章のうちより形容詞をぬき出して、その語形を説明せよ。

- 一。鶯の歌高き梢にあり。
- 二。名惜しくば、恥を知れ。
- 三。水至つて清ければ、魚なし。
- 四。故きを温ねて、新しきを知る。
- 五。あの色の白いのは鶴で、その小さい方は雌です。
- 六。今日は珍しい日和で、遊に出る人がなか／＼多い。
- 七。木の葉落ち盡くして、空を見るに障少きは嬉し。

次の様式に倣ひて、左の諸形容詞の活用の表を作れ。

形容詞	變化せぬ部分	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
長し	なが	く	く	し	き	けれ
新しい	あたらし	く	く	い	い	けれ

- 八。淺し。重し。黒し。寒し。高い。廣い。
- 九。親し。正し。樂し。久し。優しい。惜しい。

第十一章 助動詞の語形の類別

六 動詞の如き活用をなす助動詞の語形。動詞の如き活用をなす助動詞は、いづれも動詞と同じく、未然連用、終止、連體、已然、命令の六語形を具ふ。

る	れ	る	る	る	る	れ	れ
らる	られ	らる	らる	らる	らる	らるれ	られ
(未然形)	(連用形)	(終止形)	(連體形)	(已然形)	(命令形)		

下のたりの前なるは體言にのみ附くものにて、後なるは動詞及び助動詞に附くものなり。

	(一)	(二)	(三)					
す	たり	なり	たり	ぬ	べかり	ざり	けり	り
せ	たり	なり	たり	な	べから	ざら	けら	ら
せ	たり	なり	たり	に	べかり	ざり	けり	り
す	たり	なり	たり	ぬ	べかり	ざり	けり	り
する	たる	なる	たる	ぬる	べかる	ざる	ける	る
すれ	たれ	なれ	たれ	ぬれ	べかれ	ざれ	けれ	れ
せ	たれ	なれ	たれ	ね	べかれ	ざれ	けれ	れ

五 口語にては、るはれる、らるはられる、すはせる、さすはさせるとなりて、いづれも動詞の下一段活用の如き活用をなすこと、既に説きたり。その語形左の如し。

れる。	れ	れ	れる	れる	れ、	れ
られる。	られ	られ	られる	られる	られ、	られ
せる。	せ	せ	せる	せる	せれ	せ
させる。	させ	させ	させる	させる	させれ	させ

また「行きたり」などのたりは、口語にては「た」となる。但し文語に對する連用形を闕く。

た。	たら	た	た	たれ
	(未然形)	(連用形)	(終止形)	(連體形)
			(已然形)	(命令形)

六

形容詞の如き活用をなす助動詞の語形。形容詞の如き活用をなす助動詞は、いづれも形容詞に似て、大抵未然、連用、終止、連體、已然の五語形を具ふ。

べし。	べく	べく	べし	べき	べけれ
ごとし。	ごとく	ごとく	ごとし	ごとき	ごとけれ
まじ。	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ
たし。	たく	たく	たし	たき	たけれ

右のまじは、口語にては「まい」となりて、終止形、連體形として用ゐられ、また「たし」は「たい」となりて、口語の助動詞ない、らしいと共に、口語の形容詞の如き活用をなし、終止形と連體形との差別なし。

七 特殊の活用をなす助動詞の語形。

ず。	ず	ず	ず	ぬ	ね
む。	—	—	む	む	め
けむ。	—	—	けむ	けむ	けめ
らむ。	—	—	らむ	らむ	らめ
き。	—	—	き	し	しか

ずは、口語にては、その終止形もぬとなりて、連體形と同じき形をなし、またむは口語にては、うまたはようとなりて、た終止形としてのみ用ゐらる。

▲助動詞の語形の類別
（動詞の如きもの六語形を具ふ）
 （形容詞の如きもの五語形を具ふ）
 特殊のもの（ず）の外は三語形を具ふ

例題

次の文章のうちより助動詞をぬき出して、その語形を説明せよ。

- 一。蒔かぬ種子は生えぬ。
- 二。人に譽められるやうに書かう。
- 三。余は思ひいづるまゝに書きつゞけぬ。
- 四。人をして恍として故國にある想あらしむ。
- 五。父の友なる人も來れり。
- 六。かれが口惜しく思ひつるも理なり。
- 七。瑞西は世界の遊園と稱せらるゝ所なり。
- 八。講畢りぬれば、その義を請ひ問ふことなどもありき。
- 九。經傳を讀めば、聖賢の教を聞くが如きこゝちせらる。
- 一〇。土人の住居のその間に點綴せる狀、一々指點すべし。
- 一一。風雅の風雅たる、それこゝにあらむ。
- 一二。日を貫くとかいひけむ白虹の光も、かくやとばかり思はる。

第十二章 助動詞の連結 その一

六 活用連語

許さる。

許されず。

許されざるべし。

許されざるべからず。

かやうに用言と助動詞との連結したるものを活用連語といふ。活用連語は単一なる用言と見ることを得べく、その意味は、連結したる用言及び助動詞の一つくゝの意味を尋ねて知るべし。

六

活用連語の構成。活用連語には、用言と助動詞とにて成れ

るものの外に、助動詞のみにて成るもの、助詞を含むもの、一つより多く動詞または形容詞を含むものなどもあり。

君、候補者たるべきなり。

それ、蓋し事實ならん。

床には、舊師の寫眞を掲げてあり。

かれは、同意せしめ難し。

死を視ること歸するが如くなりき。

次の二例の如きものも、また活用連語なり。

われはこの間に答ふるを得べし。

かれらは決して目的を達する能はざらん。

活用連語の語形。活用連語の語形は、最終に来る用言または助動詞の語形による。

下の二例は連體形答ふる及び達するの下に、いづれも名詞ことを略せるなり。

七

未然形。見るべからざらしめたら。
 連用形。見るべからざらしめたり。
 終止形。見るべからざらしめたり。
 連體形。見るべからざらしめたる。
 已然形。見るべからざらしめたれ。
 こゝに命令形を闕くは、たりにこの語形の具らざるによるなり。

例題

次の文章のうちより、動詞形容詞助動詞及び活用連語をぬき出して、その語形を説明せよ。

例。妻なるは幼き兒どもなど抱きたれば、目覺めぬ様にと起き出づ。

なる

幼き

抱きたれ

目覺めぬ

起き出づ

助動詞、連體形。

形容詞、連體形。

活用連語、已然形。

活用連語、連體形。

動詞終止形(起き、連用形)。

- 一。その勢思ひやるべし。
- 二。人間は活動せざるべからず。
- 三。物のあやめも分かぬ頃家には歸るなり。
- 四。潮満ちたらば通り難かるべし。
- 五。世に處するに常識なかるべからず。
- 六。わが馬車の驢馬に挽かせたるもどりの空車を追ひ越ししこ
と、幾度ぞや。
- 七。鎮守の森をして一村一郷の中心たるの實あらしむべきなり。
- 八。雲の上の事は筆に載するも畏ければ洩らしぬ。

- 九。吾等がこの城に残り留りし事、かゝる時の料に侍り。
- 一〇。心ある人は、久しき宿弊の更に破りがたきを、公の破られたることを知るならん。
- 一一。かれが遂にその志すところを完成したりしは、一に元氣勃勃として、燃ゆるがごとき熱心を胸裏に藏めたるによれり。
- 一二。動植物ともに、各自皆食ふやうに、食はれぬやうに、殺すやうに、殺されぬやうにと競争して居るのが、實際の状態である。
- 一三。君がこれを企てたるも、兩國の和好を全くせんがためならん。

第十三章 助動詞の連結 その二

七 助動詞の連結の法則 例へば

説明せしめらるべし、
書かしめしならん

といふ活用連語は、それぐ

説明す、しむ、らる、べし、

書く、しむ、き、なり、ん

といふ動詞及び助動詞を連結せしめたるものなり。これによりて、しむらるんは動詞助動詞の未然形を、きは連用形を、べしは終止形を、なりは連體形を承くといふ定めあることを知るべし。

すべて助動詞の連結には、かやうの定まりたる法則あり。これ甚だ煩はしきが如くなれど、われらは自國語のことなれば、習慣によりて、その大體を心得てあるなり。今、次々に助動詞の連結の法則の特に注意すべきものを説明すべし。

三

るらるの連結。るらるは、意味相同じく、るは四段、良行變格、奈行變格の三活用の動詞に付き、らるはその他の活用の動詞に付き、いづれもその未然形を承く。助動詞にては、らるは下二段活用の如き活用をなす、すすしむの三助動詞に限りて付き、またその未然形を承く。

行	あ	死			
か	ら	な			
	る				
起	受	せ	こ		
き	け	爲	來		
(著)	(蹴)				
	ら				
せ					
	さ				
	せ				
	ら				
	る				
		し			
		め			

されば、左行變格活用の動詞はその未然形よりらるに連な

りて、例へば

罪せらる、

解釋せらる

といふべきを、

罪さる、

解釋さる

とやうにいふことあり。かやうにしてさる及びその口語のされるといふ二助動詞出で來れり。

(未然形) (連用形) (終止形) (連體形) (已然形) (命令形)

さる。 され され さる さるゝ さるれ され

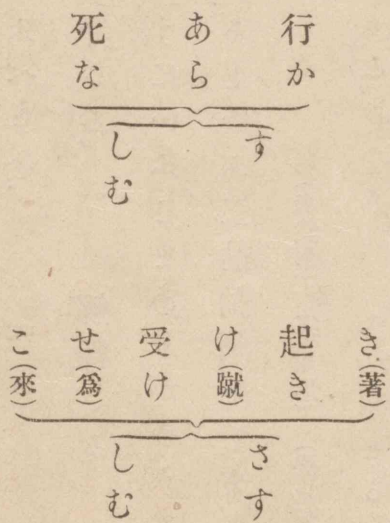
される。 され され される される されゝ され

るの口語れるらるの口語られるも、その連結の法則は、及びらるに準ず。

三

すすしむの連結。この三助動詞は、意味相同じく、すは四

段良行變格、奈行變格の三活用の、さすはその他の活用の動詞に付き、しむは通じて諸活用の動詞に付き、すべてその未然形を承く。またしむは助動詞る、らる、ざり、べかり及び體言のみに附くたりに付き、同じくその未然形を承く。



されば左行變格活用の動詞は、その未然形よりさすに連なりて、例へば

手習せさす、

賣買せさす

といふべきを、

手習さす、

賣買さす

とやうに、せを略していふことあり。

また下二段活用の動詞う(得)は、その未然形えより直にしむに連なりて、

え(得)しむ

といふべきを、

え(得)せしむ

とやうにいふことあり。

すの口語せる、さすの口語させるも、その連結の法則はす及びさすに準ず。しむには、これより遷りたる口語なし。

七 動詞の音便。

つとたりとが動詞助動詞に附くには、その連用形を承く。このて、たらたり、たる、たれ及びこれに對する口語の助動詞が四段、良行變格、奈行變格の三活用の動詞の連用形を承けて、

聞きて、次ぎて、

會ひたら

死にたり、喜びたる、止みたれ、

待ちた、習ひて、ありた

などいふべきを、音便にて

聞いて、次いで

會うたら

死んだり、喜んだる、止んだる

(イ音便)

(ウ音便)

(ン音便)

待つた、習つて、あつた

(促音便)

などとする事あるは、既に説きたり。

七

きの連結。きが動詞及び助動詞に附くには、その連用形を

承くるを通則とす。されど、この助動詞が左行變格活用の

動詞に附くには、その三語形きししかは二つに分れて、きは

連用形を承け、しとしかとは未然形を承く。また加行變格活

用の動詞に附くは、しとしかとのみにて、共に未然形をも連

用形をも承け、きは絶えてこれに連ならず。

(未然形)

(連用形)

せ(爲)

きししか

こ(來)

し(爲)

きししか

き(來)

きししか

さて、このし、し、しが左行四段活用の動詞に附くときは、

なしし、なししか
 などいふべきを、左行變格活用の如く、せの音より續けて、
 なせし、なせしか
 などとやうに用ゐることあり。

共

べし、べかりまじらしの連結。これらの助動詞が動詞、助動詞に附くには、その終止形を承くるを通則とした、良行變格活用の動詞及び良行變格活用の如き活用をなす助動詞に限りては、その連體形を承く。されば
 起きべし、捨つるべからず、
 受けまじ、信ずるまじ、
 恥づるらし、書かしむるらし
 などとやうに用ゐるは、誤なり。これらは

七

起くべし、捨つべからず、
 受くまじ、信ずまじ、
 恥づらし、書かしむらし
 などとやうに正すべきなり。
 べし、べかりには、これより遷りたる口語なし。口語の助動詞にては、まいは口語の四段活用の動詞の終止形、左行變格活用の動詞の連用形及び他の動詞、助動詞の未然形を承く。
 行くまい、
 信じまい、
 起きまい、受けまい、き著まい、こ(來)まい、
 許されまい、受けられまい。
 らしいは口語の動詞、形容詞、助動詞の終止形を承く。

六 りの連結。りは四段活用及び左行變格活用の動詞に限りて付き、四段活用にては已然形を、左行變格活用にては未然形を承く。

行けり。 示せり。 勝てり。 買へり。

せ(爲)り。 評せり。 信ぜり。 明にせり。

されば、この兩活用以外の活用をなす動詞に、りを連ねて、

起けり、 受けり、 載せり、 衰へり

などいふは、誤なり。これらは、その意によりて

起きたり、 受けたり、 載せたり、 衰へたり

などとやうに正すべきなり。

このりは、もとより形容動詞には附かざれど、異なりといふ語に限りて、また異なれりとやうに用ゐることあり。

九

またこの形容動詞には、その連用形よりて及びたりに連なりて、

異なりて、 異なりたり

とやうに用ゐらるゝ異例もあり。

例題

次の文章に誤あらば正して、その理由を述べよ。

- 一。 出品に手を觸るゝべからず。
- 二。 聖武天皇は金銅の大佛を鑄らしめ給へき。
- 三。 その事業は永く國民に記憶されべきものなり。
- 四。 雨がやんだら、散歩に行こふ。
- 五。 今鳴いた鳥は、杜鵑だと思ふた。
- 六。 たれかに頼むで案内ささう。
- 七。 受験者はこの一節を讀まされて、講義ささる。

- 八。子に外字新聞を譯さして聞くを樂とせり。
- 九。かれは熱心に研究ししかば、好結果漸く顯れり。
- 一〇。この圖は某の名工の寫ししものと言ひ傳へり。
- 一一。餘興には、名ある講談師を招みて、義士傳を談らさん。
- 一二。村民に致して、先生の職に復されんことを請へり。

第十四章 動詞の性

ハ

動詞の性。

- 一。咲く、飛ぶ、起く、出づ、衰ふ、榮ゆ。
- 二。書く、讀む、受く、撫づ、貯ふ、愛す。

これらの動詞のあらはす動作のうちにて、第一の咲く、飛ぶなどは、その動作をなす事物の名を擧げて、例へば

「花が咲く。」 「鳥飛ぶ。」

などいひて、その意味完けれど、第二の

書く、讀む

などは、その動作をなす事物の名を擧げて、例へば

「生徒は書く。」 「書記讀む。」

などいふのみにては、その意味完からず。これらは必ずその動作の及ぶ目的となる事物の名をも擧げて、

「生徒は作文を書く。」 「書記、議案を讀む。」

などいふべきものなり。されば、動詞には、そのあらはす動作の性質によりて、二つの別あり。これを動詞の性といふ。

自動と他動と。動詞の性のうちにて、動作が動作主のみにて成り立つ性質のものを自動といひ、その動作主と別に動

作の及ぶ目的とありて始めて成り立つ性質のものを他動といふ。前にいへる第一の

咲く、飛ぶ、起く、出づ、衰ふ、榮ゆ

などいふ動作は、即ち自動にて、第二の

書く、讀む、受く、撫づ、貯ふ、愛す

などいふ動作は、即ち他動なり。

八三 他動の目的をいふには、助詞をを要す。このをは省略することあり。

花(を)見る人。 友(を)呼ぶ千鳥。

八三 自動詞と他動詞と。自動をあらはす動詞を自動詞といひ、他動をあらはす動詞を他動詞といふ。かの咲く、飛ぶなどは即ち自動詞にて、書く、讀むなどは即ち他動詞なり。

八四 自動詞と他動詞と、その語形の全く相同じきものあり。

(自動)

水増す(四段活用)。

汽車發す(左行變格活用)。

八五 また自動詞と他動詞と、その語原は相同じく、語形は相異なるものあり。

(自動)

舟動く(四段活用)。

式始る(四段活用)。

子生まる(下二段活用)。

旗立つ(四段活用)。

綱切る(下二段活用)。

(他動)

主人、賃金を増す(四段活用)。

螢、光を發す(左行變格活用)。

(他動)

蒸氣力、舟を動かす(四段活用)。

幹事、式を始む(下二段活用)。

犬、子を生む(四段活用)。

友、志を立つ(下二段活用)。

小兒、紙を切る(四段活用)。

後の二つの例にては、語形相同じく、紛れ易けれど、

「旗立たず。」

「友志を立てず。」

「綱切れず。」

「小兒紙を切らず。」

などの用例によりて、その活用の異なることを知るべし。

▲動作の性質—動詞の性

自動……自動詞	語の全く異なるもの(咲く、書く)
他動……他動詞	語の全く同じきもの(増す)
	語原の同じきもの
	(一) 動く、動かす
	(二) 立つ、立つ

例題

次の文章のうちより動詞をぬき出して、その性を説明せよ。

- 一。精神一たび到らば、何事か成らざらん。
- 二。かれは燃ゆるが如き熱心を胸裡に藏めたり。
- 三。鐵欄高く空際に横たはり、石柱深く河底に入る。
- 四。課いまだ満たざるに、日暮れんとす。
- 五。空飛ぶ鷗、鳴く音清らに、物もなき海朝嵐吹く。

六。春風は軽くわが袖を拂ひ、また絲長き堤の柳を吹く。

七。箱の中へは、水を満たしたコップを入れた。

八。蒔かぬ種は生えぬ。

次の漢字を幾様にも動詞に訓みて、その性を別ち、活用を示せ。

九。終。開。閉。焼。止。

一〇。折。歌。變。違。整。

第十五章 動詞の相

六 所相 例へば、

送らる、

迎へらる

などは、「送る」「迎ふ」といふ動作を、他より受くる意にいふものにて、これを所相といふ。所相をあらはすには、助動詞るま

たはらるを用ゐる。さるも名詞と共に熟語を成し、所相をあらはすに用ゐらる。

七 使役相。例へば、

送らす、送らしむ、

迎へさす、迎へしむ

などは「送る」「迎ふ」といふ動作を、他をしてなさしむる意にいふものにて、これを使役相といふ。使役相をあらはすには、助動詞「す」「さす」及び「しむ」を用ゐる。

使役相はまた所相にいふことを得。

送らせらる、送らしめらる。

迎へさせらる、迎へしめらる。

八 勢相。所相をあらはするらるは、例へば

「今夜はよく眠らる。」

「いかやうにも考へらる。」

などとやうに用ゐられて、「眠ることを得」「考ふることを得」とやうに、おのれの力にて能くなすことを得る意をあらはすことあり。これを勢相といふ。

九 勢相をあらはするの口語れるが、四段活用の動詞に附きて、

行かれる、遊ばれる、飲まれる、眠られる

などとなるとき、約りて

行ける、遊べる、飲める、眠れる

などとやうに、一種の下一段活用の動詞をなすことあり。

十 勢相は、また助動詞「べし」を用ゐてもあらはすことを得。

腰間の秋水、鐵をも斷つべし。

能ふといふ動詞は打消にのみ用ゐらる。

九一

また活用連語にて勢相をあらはすことを得。

われはこの間に答ふるを得。

かれらは決して目的を達する能はず。

九二

敬相。る、らるは、また例へば

「先生、家を田舎に移さる。」

「父は毎年上京せらる。」

「大臣は祕書官をして應接せしめらる。」

などとやうに用ゐられて、「移す」「上京す」「應接せしむ」などいふ動作を、敬ふ意にあらはすことあり。これを敬相といふ。

九三

使役相をあらはす助動詞す、さす及びしむも敬相をあらはすことあり。通常、その連用形に敬ふ意の動詞給ふを連ねて用ゐる。

殿下、式場に臨ませ給ふ。

縣下の名産を御旅館に集めさせ給ふ。

おほやけも行幸せしめ給ふ。

九四

またす、さすにらるを重ねても、敬相をあらはすことあり。

殿下、式場に臨ませらる。

縣下の名産を御旅館に集めさせらる。

九五

複雑なる活用連語の相。相の助動詞は、種々の意味をあらはす他の助動詞などと相連なりて、複雑なる活用連語を造ることあり。

捕へられざるべし。

名をなさしめたるならん。

親しく見るがごとくならしむ。

(所相)

(使役相)

(使役相)

學ばしめられん。

(使役相の所相)

容易に信ぜられざるなり。

(勢相)

復起たれざらしめたり。

(勢相の使役相)

御志を遂げさせらるべかりしなり。

(敬相の勢相)

▲動詞の相

敬	勢	使役相(す、さす、しむ)	所相(る、らる)
相(る、らる、せ給ふ、させ給ふ、しめ給ふ、せらる、させらる)	相(る、らる、べし)		

例題

次の文章につきて動詞の相を説明せよ。

- 一。秋の色も思ひやられて、うれし。
- 二。このまゝにて歸らば必ず翁に叱られん。
- 三。公は暇あるごとに親しく農事を談ぜられき。
- 四。龍顔殊に快く笑はせ給ふ。
- 五。平將門は檢非違使になれなかつた爲に謀叛した。

雑 過去 例へば、

第十六章 動詞の時

- 六。汝自ら爲し得べき事を人に爲さしむることなかれ。
- 七。野は細流に縦横に截られ、街は水に夾まれたり。
- 八。主上隱岐國へ遷されさせ給ふ。
- 九。軍旅の事は兵に譲られよと諸卿僉議ありけり。
- 一〇。主人は自ら風呂を焚きて入浴せさするを例とせり。
- 一一。燐光船橋に及び海底もまた見え透くかと疑はる。
- 一二。人をして眞に人世の光景にあらざるかを疑はしむ。

「花咲きき。」

「翁、魚を釣りけり。」

などの咲きき釣りけりは、「咲く」「釣る」といふ動作を、今より前

に起りしものとして、いふものにて、これを過去といふ。過去をあらはすには、助動詞きまたはけりを用ゐる。この二語はその意相同じく、けりが動詞または助動詞に附くには、その連用形を承く。

七 未來。次にまた

「花咲かむ。」

「翁魚を釣らむ。」

などの咲かむ、釣らむは、咲く、釣るといふ動作を、今より後に起るべきものとしていふものにて、これを未來といふ。未來をあらはすには、助動詞むを用ゐる。この語が動詞、助動詞に附くには、その未然形を承く。

八 現在。さて「咲く」「釣る」といふ動作を、今現に起るものとしていふには、そのまゝ

「花咲く。」

「翁魚を釣る。」

などと用ゐる。これを過去及び未來に對して、現在といふ。動詞の時。動作または存在を、その起る時間によりて種々に言ひあらはすことを、動詞の時といふ。動詞の時には、即ち現在過去、未來の三つの言ひあらはし方あるなり。

二〇 時間には關係なく、單に動作または存在をいふには、もとより動詞の時を用ゐず。

馬は善く走る。

明治三十七年二月、日本、ロシヤに對する戰を宣す。

明日、同窓會あり。

右の例にては、走る、宣すありは、いづれも時間をいふ意のなきものなり。されば、もとより現在にはあらず。

101 現在完了。例へば

「花咲きぬ。」

「翁、魚を釣りつ。」

「花咲けり。」

「翁、魚を釣りたり。」

などの咲きぬ釣りつ、咲けり、釣りたりは「咲く」「釣る」といふ動作が現在には既に終りたることをいふ意なり。これを現在完了といふ。現在完了をあらはすには、現在の時に完了をいふ意の助動詞つぬたり及びりを加ふ。つぬたりが動詞、助動詞に附くには、その連用形を承く。

102 103 104 105 106 107 108 109 110 111 112 113 114 115 116 117 118 119 120 121 122 123 124 125 126 127 128 129 130 131 132 133 134 135 136 137 138 139 140 141 142 143 144 145 146 147 148 149 150 151 152 153 154 155 156 157 158 159 160 161 162 163 164 165 166 167 168 169 170 171 172 173 174 175 176 177 178 179 180 181 182 183 184 185 186 187 188 189 190 191 192 193 194 195 196 197 198 199 200 201 202 203 204 205 206 207 208 209 210 211 212 213 214 215 216 217 218 219 220 221 222 223 224 225 226 227 228 229 230 231 232 233 234 235 236 237 238 239 240 241 242 243 244 245 246 247 248 249 250 251 252 253 254 255 256 257 258 259 260 261 262 263 264 265 266 267 268 269 270 271 272 273 274 275 276 277 278 279 280 281 282 283 284 285 286 287 288 289 290 291 292 293 294 295 296 297 298 299 300 301 302 303 304 305 306 307 308 309 310 311 312 313 314 315 316 317 318 319 320 321 322 323 324 325 326 327 328 329 330 331 332 333 334 335 336 337 338 339 340 341 342 343 344 345 346 347 348 349 350 351 352 353 354 355 356 357 358 359 360 361 362 363 364 365 366 367 368 369 370 371 372 373 374 375 376 377 378 379 380 381 382 383 384 385 386 387 388 389 390 391 392 393 394 395 396 397 398 399 400 401 402 403 404 405 406 407 408 409 410 411 412 413 414 415 416 417 418 419 420 421 422 423 424 425 426 427 428 429 430 431 432 433 434 435 436 437 438 439 440 441 442 443 444 445 446 447 448 449 450 451 452 453 454 455 456 457 458 459 460 461 462 463 464 465 466 467 468 469 470 471 472 473 474 475 476 477 478 479 480 481 482 483 484 485 486 487 488 489 490 491 492 493 494 495 496 497 498 499 500

花が咲いた。 翁が魚を釣つた。

103 過去完了。例へば

「花咲きにき。」

「翁、魚を釣りてき。」

「花咲けりき。」

「翁、魚を釣りたりき。」

などの咲きにき、釣りてき、咲けりき、釣りたりきは「咲く」「釣る」といふ動作が過去に既に終りたることをいふ意なり。これを過去完了といふ。過去完了をあらはすには、過去の時に完了の助動詞を加ふ。その連結の次第は、右の諸例に示すが如し。

104 未来完了。例へば

「花咲きなむ。」

「翁、魚を釣^りてむ。」
「弟歸^りたらむ。」

などの咲^きなむ釣^りてむ歸^りたらむは、咲^く、釣^る、歸^るといふ動作が、未來には既に終りたるべき由をいふ意なり。これを未來完了といふ。未來完了をあらはすには、未來の時に完了の助動詞を加ふ。その連結の次第は、右の諸例に示すが如し。

一五

複雑なる活用連語の時。時の助動詞、完了の助動詞は更に他の助動詞などと相連なりて、複雑なる活用連語を造る。

知らる^る(現在)、
知られ^き(過去)、
知られむ^む(未來)、
知られたり^{たり}(現在完了)、
知られたりき^き(過去完了)、
知られたらむ^む(未來完了)。

知らしむ^む(現在)、
知らしめ^き(過去)、
知らしめむ^む(未來)、
知らしめらる^る(現在)、
知らしめられ^き(過去)、
知らしめられむ^む(未來)、
知らせ給^ふ(現在)、
知らせ給ひ^き(過去)、
知らせ給はむ^む(未來)、
知らず^ず(現在)、
知らざり^き(過去)、
知らざらむ^む(未來)、
知らしめたり^{たり}(現在完了)、
知らしめたりき^き(過去完了)、
知らしめたらむ^む(未來完了)、
知らしめられたり^{たり}(現在完了)、
知らしめられたりき^き(過去完了)、
知らしめられたらむ^む(未來完了)、
知らせ給ひたり^{たり}(現在完了)、
知らせ給ひたりき^き(過去完了)、
知らせ給ひたらむ^む(未來完了)。

知るべし(現在) 知りたるべし(現在完了)
 知るべかりき(過去) 知りたるべかりき(過去完了)
 知るべからむ(未来) 知りたるべからむ(未来完了)
 特待生たり(現在)
 特待生たりき(過去)
 特待生たらむ(未来)
 知るなり(現在)
 知るなりき(過去)
 知るならむ(未来)
 知るなるべし(現在) 知りたるなるべし(現在完了)
 知りしなるべし(過去) 知りたりしなるべし(過去完了)

知らざらしむ(現在) 知らざらしめたり(現在完了)
 知らざらしめき(過去) 知らざらしめたりき(過去完了)
 知らざらしめむ(未来) 知らざらしめたらむ(未来完了)
 知らざらしむべからず(現在)
 知らざらしむべからざりき(過去)
 知らざらしむべからざらむ(未来)

▲完了(つ、ぬ、たり、り)
 現在(い、ぬ、たり、り) — 現在完了
 過去(き、けり、にき、たりき、りき) — 過去完了
 未来(む、てむ、なむ、たらむ) — 未来完了

例題

次の文章につきて動詞の時を説明せよ。
 一。褒賞を蒙りしこと前後數回に及べり。

- 二。深く心を痛めしに、幸に事なきを得たり。
- 三。日本國中に洋字を知るもの、遂になきに至りぬ。
- 四。遊學せんの志ありつれど、旅費學費、心に任せず。
- 五。かくて實朝も失せしかば、政柄は遂に源氏より北條氏に移りたりき。
- 六。いざ見て來むとて、馬を乗りいだしたり。
- 七。君も紀伊殿にておはせん程は、さてもありなん。
- 八。警固の武士、山陰道にかゝり、遷幸をなし奉りける間、高德が支度相違してけり。
- 九。隣の老嫗よりもらひし絲萩の刈株、寸ばかり縁を吹いて、伸びたらむ秋の色も思ひやられて、うれし。
- 一〇。幕使の一行は開港延期の談判に及びけるに、延期は素より露國政府にて承諾したりしかども、こゝに困難なるは樺太境界の談判にてありき。

次の諸動詞につきて、相及び時をあらはす活用連語を別々に造り、更に時と相とを重ねたる活用連語を造れ。

- 一。 住む。 退く。 愛す。 決す。
- 二。 見る。 らる。 ず(ざり)。 しむ。 べし(べかり)。

第十七章 助詞の承接

一〇六 助詞の承接の法則。 助詞には、

わが家、
都より來、
などのが、よりの如く、専ら體言に附くものと、
花咲かば、 色白くば、
花咲きたれど、

などのば、どの如く、専ら用言または助動詞に附くものと、
 日本は強し、願はくは聞かん、都よりは來ず、
 たれか知る、君、知れるか、いづこへか去りし、
 などののは、かの如く、種々の語に附くものとあり。
 助詞が他の語に附くにも、また定まりたる法則あり。次に
 その特に注意すべきものを説明すべし。

一七

體言に附く助詞の承接。 助詞のうちにて、専ら用言または
 助動詞に附くば、ともどもなどを除けば、餘は皆體言に附
 くことを得るものなり。これら、體言に附く助詞は、その附
 くべき體言の略せられたるがために、直に用言または助動
 詞の連體形を承くることあり。
 が。白きが美し。雪の積りたるが見ゆ。

の。花を見るの記。入學せしむるの義務。
 に。信ずるによる。受くべきにあらず。
 を。恙なきを喜ぶ。及第せしを報ず。
 と。欲すると欲せざると。富めると貧しきと。
 へ。低きへ流る。
 より。近きより先にす。思ひしより易し。
 まで。斃るゝまでやまず。告げらるゝまで待つ。
 は。棄つるは惜し。學ばざるは恥なり。
 も。知るも知らぬも。白きも美し。
 や。わが軍の旅順を攻むるや、壯烈を極めたり。
 一八
 かやうに體言を略したる場合には、口語にては、大抵、その代
 に助詞のを用ゐて、連體形を承けしむるものとす。

雪の積つたのが見える。
恙ないのを喜ぶ。
棄てるのは惜しい。
知るのも知らぬのも。

二〇九 との承接。

月と花と。
京都と神戸と長崎とに行く。
志のあるとなきを問はず。
かやうに事物を列挙するに用ゐる助詞とは、幾つにても重ぬるを法とす。これを、最終のと一つを略して、
月と花、
京都と神戸と長崎に行く、

志のあるとなきを問はず、
とやうにいふことあり。但し

文法と文學史との大要を學ぶ、
文法と文學史の大要とを學ぶ、

などの場合には、との所在によりて意味異なり、これを略すれば誤解を生すべきが故に、決して省くべからず。

二一〇 またとは、語句を一つの體言と見て、これに附くことあり。

神をありと思ふ。

徳あるを最も貴しとす。

國富めりと聞く。

かやうの場合には、用言活用連語などの終止形を承くるを法とすれど、また次の如く連體形を承くることあり。

月出づると見えて。

嘲弄せらるゝと思ひて。

終日業務を取扱はしむるといふ。

萬人皆その徳を稱へけるとぞ。

二三 用言及び助動詞に附く助詞の承接 用言及び助動詞に附

くことを得る助詞は、

ぞ、のみ、ばかり、や、か、

ば、とも、ど(ども)、に、を、

が、で、かな、つゝ

などなり。このうちにて、ぞのみばかりにをがかなは用言及び助動詞の連體形を承く。

ぞ。 船見ゆるぞ。 遅きぞ。 勝ちたるぞ。

のみ。 戯るゝのみなり。 人の知らざるのみ。

ばかり。 天地の崩るゝばかり。

に。 かれに問ひしに、かれも知らざりき。

を。 謹みてあるべきを、こはいかに。

が。 しばく、試みしが、遂に成らざりき。

かな。 久しきかな。 心を傷ましむるかな。

またではずしてと同じきものなれば、助動詞すと同じく、用言及び助動詞の未然形を承く。

で。 音もせで降る。 人に知られで來。

つゝは完了の助動詞つを重ねたるものなれば、用言及び助動詞の連用形を承く。

つゝ。 燃えつゝあり。 讀ませつゝ書く。

二三 やかの承接。

ありやなしや。君知れりや。
あるかなきか。君知れるか。

かやうに疑ふ意の助詞やとかとが用言助動詞に附くには、
やはその終止形を承け、かは連體形を承くるを法とす。

二三 また上に疑ふ意の語あるときに限りて、

たれにか問はむ、

幾ばくなるか、

いかなる故にか、

いかにすべきか、

などとやうに、かを用ゐても、やをば用ゐずといふことあり。
されど、今はこれらの差別なく、やをかと同様に用ゐる。

二四 ばの承接。

行かば、善くば、せられば。

行けば、善ければ、せらるれば。

かやうに、ばは用言助動詞の未然形または已然形を承けて、
共に當然の結果を生ずべき原因を未然の意または已然の
意にいふ。

二五 ともどもとの承接。

行くとも、善くとも、せらるとも。

行けどども、善けれどども、せらるれども。

かやうに、ともは動詞助動詞の終止形、形容詞の未然形を、ど
どもは通じてその已然形を承けて、共に前後の事件の相反
對するをいふ。ともは假定、どどもは決定をあらはす。

ともは、まゝ、動詞、助動詞の連體形を承くることあり。
數百年を經るとも。

いかに批評せらるゝとも。

強ひてこれを遵奉せしむるとも。

二六

ともとどどもとは、そのあらはす事件が假定のものなるか、
決定せるものなるかに隨ひて、

「請願書は會議に附すとも、これを朗讀せず。」

「請願書は會議に附すれども、これを朗讀せず。」

「給金は低くとも、應募者は多かるべし。」

「給金は低けれども、應募者は多かるべし。」

などとやうに、用ゐる分くべきものなれど、誤解を生ぜざる限、
いづれの場合にももを代用して、用言助動詞の連體形を承

けしむることあり。

何等の事由あるも、議場に入ること許さず。
期限は今日に迫りたるも、準備は未だ成らず。
經過は頗る良好なりしも、昨日より聊か疲労の狀あり。

▲助詞の承接

體言に附くもの—連體形を承く(用言及び助動詞に附く場合)
未然形を承く(で、ば、とも)
連用形を承く(つゝ)
終止形を承く(や、とも)
連體形を承く(そのみ、ばかり、に、を、が、かな、かも)
已然形を承く(ば、ども)

▲との承接

體言に附くとき—一つごとに加ふ
用言及び助動詞—終止形を承く
に附くとき

例題

次の文章のうちより助詞をぬき出せ。

一。敵の本陣は今や眼下にあり。

- 二。 涙はらひて、これまでと、東へ西へわかれゆく。
- 三。 何人も外國史に慘酷無道の事が多いのに驚く。
- 四。 令弟が果して實業に適せりや否やを憂ひ申し候。
- 五。 その美しさ、まことに形容し得べくもあらず。
- 六。 今より後は、魚と水との如くにして、先祖の恥をすゝぎ、亡魂の憤を息めん。
- 七。 かゝる至難の學なるに、僅に四年にして業を成したるは驚歎すべきことならずや。
- 八。 たとひ、家康が命終るとも、汝等が世にあらんを頼にこそ死すべけれ。
- 九。 泰時運盡きたらば、鐵の築地を築くとも、助かり候はじ。運ありて君に仕ふべくば、これにて事足り候ふべし。
- 一〇。 十分に張りたる白帆の、破れもするかと見ゆるまで、膨らみ孕みて、少し傾きたる船の、舳先の水に突き入るばかり、烈しく浪

を截つて進む快さ、駿馬に鞭うちて曠原を馳するとは、また異にして趣あり。

次の用言活用連語には、を附けて、未然と已然との事件をあらはせ。また ともとどども とを附けて、假定の事件と決定せる事件とをあらはせ。

- 一。 爲す。 あり。 著る。 老ゆ。 教ふ。
- 二。 議す。 明なり。 赫々たり。 長し。 新し。
- 三。 召さる。 讀ます。 改めしむ。 聞きたり。
- 四。 遇ひぬ。 欲しき。 思はず。 取るべし。

次の文章に誤あらば正して、それを説明せよ。

- 一五。 成績の發表せらるるを、今日か明日かと待つ。
- 一六。 舷と舷の相觸るばかりに、兩艇相接して進みぬ。
- 一七。 二十五より三と二の三倍を引けば、幾許なるや。
- 一八。 この勝負に破らるるも、一方はなほ野球界の覇たり。
- 一九。 國小なるも、國民の元氣盛なれば、外國に侮られず。

第十八章 品詞の轉成

二七

品詞の轉成。

わが國語にては、單語をその意味または形によりて類別して、名詞、代名詞、動詞、形容詞、助動詞、副詞、助詞、接續詞、感動詞の九品詞とすること、既に説けり。されば、同じ單語も、その用法によりて、一つの品詞より轉じて他の品詞となることあり。次にそのおもなる例を示すべし。

二六

轉成の名詞。

水はこほりて氷となる。

この例にて、こほりは「水」の動作をいふ單語なれば、動詞なり。また氷は事物の名をいふ單語なれば、名詞なり。即ちこの例にては、「こほる」といふ動詞は、「こほりて」としては、なほ動詞

なれど、「氷」としては、轉じて名詞となれるなり。同様に

「國の光をかゝやかせ。」

「疑は人間にあり。」

「初あらざることなく、克く終あること鮮し。」

「取扱便利なれば、買入の申込甚だ多し。」

などの光、疑、初、終、取扱、買入、申込も、光る、疑ふ、初む、終る、取扱ふ、買入る、申込むといふ動詞の、それら、轉じて名詞となれるものなり。かやうに、動詞の轉じて名詞となるには、すべてその連用形よりす。

二九

轉成の代名詞。

おのれの欲せざるところは、人に施すことなかれ。

おのれ、ひと年、旅に出でき。

前の例なるおのれは名詞なり。後の例なるおのれは「われ」といふに同じく、代名詞なり。かやうに名詞はそのまま、代名詞として用ゐらるゝことあり。

僕君と相識ること、こゝに年あり。

某物見仕るべしとて、馬を駆けさす。

これらの僕君某は皆名詞の轉じて代名詞となれるなり。

三〇 轉成の副詞。

今日の試験の科目は、國語なり。

われらは、今日國語の試験を受く。

前の例なる今日は名詞なり。後の例なる今日は「受く」といふ動詞を修飾する副詞なり。かやうに名詞は、そのまま、副詞として用ゐらるゝことあり。

風烈しく、波高し。

風烈しく吹く。

前の例なる烈しくは、「風」の有様をいふ形容詞なり。後の例なる烈しくは「吹く」といふ動詞を修飾する副詞なり。かやうに形容詞は副詞として用ゐらるゝことあり。この場合には、常にその連用形より轉ず。

三一 轉成の接續詞。

かれは、また次の如くいへり。

汽車は驛また驛を過ぐ。

前の例なるまたは「驛」を修飾する副詞なり。後の例なるまたは「驛」と「驛」を接續する接續詞なり。かやうに副詞はそのまま、接續詞として用ゐらるゝことあり。

水、膝に及び、往來に船を用ゐる。
名詞及び代名詞を體言と總稱す。

前の例なる及びは動詞、後の例なる及びは接續詞なり。

▲品詞の轉成

轉成の名詞 (動詞の連用形より轉す)

轉成の代名詞 (名詞より轉す)

轉成の副詞 (名詞と形容詞の連用形とより轉す)

轉成の接續詞 (副詞と動詞とより轉す)

例題

次の文章を一つ一つの單語に分ちて、その何品詞なるかをいへ。

- 一。古わが國には、國旗のさだめなかりき。
- 二。祖先の祭を慎み、子孫の教を忽せにせず。
- 三。われは、はじめ何處に導かるべきかを知らざりき。
- 四。われらは、一步を進みては、又一步を退く。
- 五。火球の如き月は、早く昇りて丘の上に懸れり。
- 六。忽ち又千百の巨礮を放てるが如き聲あり。

- 七。早く實務に當らせ、活動を獎勵し、手工技藝を授く。
- 八。維新のはじめに、神武の古に復るといふ大義を定められしは、この公の輔翼の力なりけり。

第十九章 單語の構造

三三 熟語。

わが國は一年に四萬噸の銅を産す。

この例にて、一年は表數名詞一と名詞年との複合して成れる熟語の名詞、また四萬噸は表數名詞四萬と名詞噸との複合して成れる熟語の名詞にて、産すは名詞産と動詞すとの複合して成れる熟語の動詞なること、既に前に説きたるが如し。

一三

身は空しく老いゆきて、功は成り難し。

老いゆきは老いとゆきとの二つの動詞にて成れる熟語の動詞にて、成り難しは動詞成りと形容詞難しにて成れる熟語の形容詞なり。かやうに動詞が、下、用言に連なりて熟語を成すには、連用形よりすること、既に説けり。

一四

かれが區々たる利害に迷はざること、明なり。

この例の區々たる、明なりなど、すべて形容動詞は副詞と動詞ありとの複合して成れる熟語の動詞と見るべきものなること、また前にいへり。

一五

夕けしき極めて美しく、誠に繪のごとし。

夕けしきは夕とけしきとの二つの名詞にて成れる熟語の名詞にて、極めては動詞極めと助動詞にて成り、誠には

名詞誠と助詞にて成り、共に熟語の副詞なり。

一六

疊語。

同志の人々、われくを迎ふとて、そこに待てり。

この例の人々は熟語の名詞、われくは熟語の代名詞にて、いづれも同じ單語の複合して成れるものなり。かやうの熟語を特に疊語といふ。

家ますく榮ゆ。

空見るく曇る。

この例のますく、見るくは、共に動詞にて成れる疊語の轉じて副詞となれるものなり。

一七

接頭辭。

御脚はやく、小山の頂に第一に登りたたまふ。

この例のうちの御脚、小山第一は、いづれも熟語の名詞なり。さて、これらの熟語を成す言語のうちにて、御小第は、いづれも単語として獨立に用ゐられず、たゞ他の單語の頭に接して、これと熟語を成すのみなり。かやうの語を接頭辭といふ。その數多からず、中には意味なきものもあり。

さ夜。み空。た走る。か弱し。相成る。

三 接尾辭。

流行をおひて今めかす人らの心のあさましさを。

この例のうち今めかすは熟語の動詞、人らあさましさは共に熟語の名詞なり。さて、これらの熟語を成す言語のうちにて、めかす、らさはいづれも單語として獨立に用ゐられず、たゞ他の單語の尾に接して、これと熟語を成すのみなり。

かやうの語を接尾辭といふ。

單一なる單語……………(時)

▲單語の構造

單語のみの複合……………(何時)
 異なる單語の複合……………(何時)
 同一單語の複合—疊語……………(時々)
 複合せる單語—熟語—單語と接頭辭との複合……………(御時)
 單語と接尾辭との複合……………(時めく)

例題

次の文章を一つ一つの單語に分ちて、その何品詞なるかをいひ、その熟語なるは特に構造を説明せよ。

- 一。山々逼りて日に疎ければ、晝ももの凄きこゝちす。
- 二。大君の御爲とならば、われをおきて人はあらじ。
- 三。夜な〜年わかき侍を遣はして、守衛せさせつ。
- 四。建築彫刻等の上にも、豪邁の氣象おのづから顯れ出でぬ。
- 五。月日の小車は、めぐり〜て流るゝ水よりも早し。
- 六。嗚呼。この人の外、千古またこの人あらんや。

- 七。果して然らば、人工の美を享受せんこと、豈また容易なりとせんや。
- 八。關白殿「安からぬ事なり、本多めにたばかられたり」と怒りたまふこと大方ならず。
- 九。家康はよき者どもあまた召しつかひけり、秀吉もその如き家人をばほしき事に候ふぞや。
- 一〇。ものゝふの矢なみつくろふ籠手の上に、あられたばしる那須のしの原。

第三篇

第一章 連語 文

一 連語

櫻 花

咲く 美し

既に たり の は

これらの八つの言語は、皆一つ一つの意味をあらはすものにて、これを單語といふこと、既に説きたり。さて、これらの單語の互に關係あるものを、種々にとりあはせて、

櫻の、 花の、 櫻は、 花は、

咲く櫻、 咲く花、 美しき櫻、 美しき花、

咲きたり、

咲きたる櫻

美しく咲く、

美しく咲きたり、

既に咲きたり、

既に咲きたる花、

既に咲きたる美しき櫻の花は、

などいふときは、種々の相關聯せる意味をあらはすことを得。かやうに單語を連結したるものを連語といふ。かの活用連語は、即ち連語の活用するものにて、右の例のうちにては、咲きたりこれなり。

二 文。また、前に挙げたる八つの單語を別に種々にとりあはせて、

櫻咲く、

櫻美し、

花咲く、

花美し、

櫻の花咲く、

櫻の花は美し、

櫻の花は咲きたり、

咲きたる櫻の花美し、

美しき櫻の花は咲きたり、

美しき櫻の花は既に咲きたり、

などいふときは、ある事物を主題として、その動作または有様を述ぶることを得。かやうに單語を組み立てたるものを文といふ。文は一つの全き思想をあらはすものなり。

▲言語連語—相關聯せる意味をあらはす(花咲く)
單語—一つ一つの意味をあらはす(花、咲く)
文—全き思想をあらはす(花咲く)

例題

次の例のいづれが文にて、いづれが連語なるかをいへ。
一。風吹く。

- 二。流るゝ水。
- 三。最も盛なり。
- 四。これも珍し。
- 五。さして行く笠置の山を出でしより、
- 六。あめが下にはかくれがもなし。

第二章 連語の構造

三 單語の連結。單語を連結するには、それ〴〵法則あり。その助動詞の連結、助詞の承接につきては、既に説きたり。また用言助動詞を、下、體言と連結するには、例へば、

咲く櫻、
 美しき花、
 咲きたる櫻、

などとやうに、その連體形を用ゐることも、前にいへり。

四 同趣の體言の連結。同趣の體言を連結するには、

月と花と、
 月また花、
 月及び花、
 月竝に花、
 などとやうに、助詞とまたは接續詞また及び竝になどを用ゐる外に、

とやうに、單にそのまゝ、連ね記すことあり。

五 同趣の用言、活用連語の連結。同趣の用言、活用連語を連結するにも、その間に接續詞を用ゐることあり、また單にこれを連ね記すことあり。いづれも上なる用言、活用連語に連用形を用ゐて、その意をいひさしおくものとす。

送りまた迎ふ。 出で或は入る。 見且聞く。

發育し、成長す。

細く、長し。 新しく且珍し。

敬せられまた愛せらる。 舞はしめ、歌はしむ。

鳴かずまた飛ばず。 恐るべく且戒むべし。

名詞に附く助動詞たり及び助動詞ごとしに終る連語を連結するにも、またこれに準ず。

師たり、弟たり。 雲のごとく、また霞のごとし。

六 完了の助動詞つゝの連用形ても、轉じて助詞の如く用ゐられ、してと共に同趣の用言、活用連語を連結することあり。

歌ひて舞ふ。 發育して、成長す。

細くて、長し。 新しくして、且珍し。

召されて、諭さる。 言ふべくして、行ふべからず。

七 「優美なり」「確なり」「詳なり」など、なり終る形容動詞を連結するには、複合せる動詞ありを略し、或はかやうに略したるものにて、またはしてを加ふ。

優美に(あり)、高尚なり。

確に(あり)て、信ずべし。

詳に(あり)して、且委し。

八 「學者なり」「名産なり」など、助動詞なり終る連語を連結するには、またそのなりを略して、にてまたはにしてを加ふ。

學者(なり)にて、文人たり。

名産(なり)にして、重要輸出品なり。

九 時及び完了の助動詞に終る連語を連結するには、その最終

の連語に附きたるもののみを存して、他を略し、さて前に説きたるが如くにして、連語を造るべし。

發育し、生長せり。敬せられ且愛せられたり。舞

はしめ或は歌はしめき。鳴かずまた飛ばざらん。

歌ひて、舞へり。召されて、諭されぬ。詳にして、且

委しかりき。學者にて、文人たりき。

二 上に説きたるが如くに連結したる連語は、これを一つの活

用連語と見て、下、體言または助詞に連ならしむることを得べし。

送りまた迎ふる人。細く長き道。師たり弟たる

關係。召されて諭さるゝ生徒。確にて信すべき

報道。名産にして重要輸出品なる生絲。發育し

生長せる苗。敬せられ且愛せられたる教師。學

者にて文人たりし父。

出で或は入らば。新しく且珍しければ。見且聞

くとも。恐るべく且戒むべけれど。歌ひて舞ふ

に。詳にして且委しきを。學者にて文人たるが。

舞はしめ或は歌はしめしかば。

二 同趣の複雑なる連語の連結。同趣の複雑なる連語も、その

體言に準すべきか、用言、活用連語に準すべきかによりて、前に説きたるが如くにして、連結することを得べし。

照る月、咲く花。

清き月、美しき花。

松島の月、吉野の花。

また

往を送りまた來を迎ふ。 盛に發育し、速に生長す。

甚だ新しく且極めて珍し。

儕輩には敬せられ、また長上には愛せらる。

先生に召されて、内意を諭さる。

最も優美に、至つて高尚なり。

近頃新説を公にせる博士にて、現に第一流の文人たり。舞を舞はしめ或は歌を歌はしめき。

▲連語の構造

單語の連結
 同趣の體言の連結
 同趣の用言活用連語の連結—形容動詞の連結—助動詞なりに終る連語の連結—時及び完了の助動詞に終る連語の連結—連結したる連語と體言及び助詞との連接
 同趣の複雑なる連語の連結

例題

次の各題の單語及び連語を連結せよ。

- 一。はふ。立つ。歩む。
- 二。質問す。答辯す。討論す。決議す。
- 三。身を修む。家を齊ふ。
- 四。歌に詠ず。詩に賦す。
- 五。小し。堅し。
- 六。讀ます。書かす。
- 七。解説せらる。批評せらる。
- 八。愛すべし。親しむべし。
- 九。甚だ速なり。最も確なり。
- 一〇。默なり。魚にあらず。
- 一一。書を読めり。字を習へり。
- 一二。招かれたり。出席せり。

- 一三。外國に留學しき。化學を研究しき。
 - 一四。技を練らん。優勝旗を得ん。
 - 一五。天を怨みず。人を尤めず。
 - 一六。朝は草を刈らしめらる。夜は繩をなはしめらる。
- 次の連語の連結を説明せよ。
- 一七。はじめより時勢の真相も知り、人理の大道を履踐する才識も備へたる者なるべけれど。
 - 一八。扶桑第一の好風にして、凡そ洞庭西湖に恥ぢず。

第三章 單文の成立

三 文の主語文の述語 文には必ずその思想の主題となる事物を擧ぐる語なかるべからず。これを文の主語といふ。ま

た必ずこの事物につきて動作、有様などを述ぶる語なかるべからず。これを文の述語といふ。

櫻咲く。

咲きたる櫻美し。

美しき櫻の花は既に咲きたり。

右の三つの文にて、櫻花は即ち文の主語にて、咲く、美し、咲きたりは即ち文の述語なり。文中にありて、主語は述語の上にあるを常とす。

三 文の成立 文は、主語と述語との間に關係の生ずるによりて、始めて成立す。されば主語と述語とは文に必要なものにて、その一方を闕きては、いかに多く單語を連ねても、ただ連語を造るに止り、決して文を成さず。

一四 單文。前に示せる三つの文の、始なるは櫻につきて咲くと
いふことを述べ、次なるは櫻につきて美しといふことを述
べ、終なるは花につきて咲きたりといふことを述べたるも
のにて、その文のうちに生ずる主語と述語との關係は、いづ
れも單一なり。かやうの文を單文といふ。されば單文とは、
そのうちに、たゞ一組の主語と述語とを備ふるものなり。
一五 主語の構成。文の主語は、その文のあらはす思想の主題た
る事物を擧ぐるものなれば、通常は體言にて、これに助詞の
伴なふことあり。

鳥飛ぶ。

月は清し。

それがよし。

車馬の往來繁し。

吹く風も快し。

一六 主語は、また、用言活用連語の連體形の下、ことものまたはと
ころに連なりて造れる連語にて成ることあり。

來ること遅し。

遠きものは至らず。

得たるところ多かりき。

またこのこと、もの略せられて用言活用連語の連體形の
直に主語となれるものあり。

かなたに見ゆるは、わが村の鎮守の森なり。

遠きも來り會す。

過ぎたるはなほ及ばざるがごとし。

一七 主語は幾つも重ぬることあり。

月花はおもしろし。 月と花とはおもしろし。

生絲及び茶はわが國の二大輸出品なり。

松島の月吉野の花は、またなき眺なり。

遠き山、近き川、かなたの森、こなたの村、皆見えすなりぬ。

かやうに幾つも主語を重ぬるには、同趣の體言を連結するが如くす。

さてこれらの文は、二つより多く主語を含めど、これらと述語との關係は單一なれば、いづれも皆單文なり。

一八 述語の構成。 文の述語は、その文の主語のあらはす事物の

動作または有様を述ぶるものなれば、通常は、用言または活用連語なること、前の諸例にも見るが如し。

なほ

風景ゑがくがごとし。

月明なり。

衆欣然たり。

水甚だ深からず。

一九 述語は、また體言の下、助動詞なりたり、ごとしに連なりて生

じたる連語にて成ることあり。

正成は忠臣なり。

父は縣會議員たり。

その仁天のごとし。

また體言の下、助詞ぞ、かに連なりて生じたる連語にて成ることあり。

汝は誰ぞ。

今著きたるは終列車か。

この場合には、中間に助動詞なるを略せりと見るべし。
述語も、また幾つも重ねることあり。

苗は發育し、生長す。

この形は新しく且珍し。

奢は恐るべく且戒むべし。

體裁優美に、高尚なり。

友は儕輩には敬せられ、また長上には愛せられたり。

かやうに幾つも述語を重ねるには、同趣の用言活用連語を連結するが如くす。

さて、これらの文は、二つより多く述語を含めど、これらと主

語との關係は單一なれば、いづれも皆單文なり。

麥も油菜も盛に發育し、速に生長す。

それとこれとは新しく且珍し。

かれとわが兄とは、同じ年に生まれ、同じ學校に學びて、

今また同じく林業に従事せり。

これらの文は、二つより多く主語及び述語を含めど、その間の關係は單一なれば、いづれも皆單文なり。

▲單文の成立

主語體言連體形がこともの、ところに連なりて造れる連語
述語用言活用連語體言がなりたり、ことしぞかに連なりて造れる連語

例題

次の單文の主語と述語とを指示せよ。

一。快甚だし。

- 二。達人は大観す。
- 三。萬民皆天日の光を仰ぐ。
- 四。景によりて情起る。
- 五。汽車は昨夜新橋を發し、今朝神戸に著きたり。
- 六。われは獨り舷頭に立ちて、河上の夜景を貪り看る。
- 七。東南の一角のみや、低くして、打ち開けたり。
- 八。教ふる所は忠孝の道義、文武の學藝なり。

第四章 文の客語

三 他動の目的。動詞の性には、自動と他動とありて、他動は、動作主の外に、別に動作の及ぶ目的ありて、始めて成り立つものなること、既に説きたり。されば、文の述語が他動詞または他動詞を含む活用連語なる場合には、必ず別に他動の目的をいふ語を用ゐて、その述語の意味を完くするを要す。

生徒は作文を書く。

書記は議案を読みあげたり。

右の文にて作文議案は即ち他動書く、読みあげたり、の目的なり。他動の目的をいふには、助詞をを要す。

三 自動の標準。自動には、その動作主の外に、なほその動作のかゝる標準をいはざれば、意味の完からざるものあり。文の述語が、かやうの自動詞または自動詞を含む活用連語なる場合には、その文には必ず自動の標準をいふ語を用ゐるを要す。

その面、猿に似たり。

伊藤博文、統監となる。

右の文にて猿、統監は即ち自動似たりなるの標準なり。自動の標準をいふには、助詞にとなどを要す。

三

他動の標準。 他動にも、動作主と動作の目的との外に、なほその動作のかゝる標準をいはざれば、意味の完からざるものあり。文の述語が、かやうの他動詞または他動詞を含む活用連語なる場合には、その文には必ず他動の標準をいふ語を用ゐるを要す。

畫工はその面を猿に似せたり。

朝廷、伊藤博文を以て統監となす。

右の文にて猿、統監は即ち他動似せたり、なすの標準なり。

他動の標準をいふにも、助詞にとなどを要す。

二四

所相の標準。 所相には、その標準として、動詞のあらはす動

下の例のを以ても、他動の目的をいふに用ゐることある連語にて、その用、助詞をに同じ。

作の動作主をいはざれば、その意味完からず。されば文の述語が所相の活用連語なる場合には、その文には、必ず所相の標準をいふ語を用ゐるを要す。

われは雨に降られたり。

友は上官に伎倆を認めらる。

右の文にて雨、上官は、降る、認むの動作主にて、即ち所相降られたり、認めらるの標準なり。所相の標準をいふには、助詞になどを要す。

二五

使役相の標準。 使役相も、その標準として、動詞のあらはす動作の動作主をいはざれば、その意味完からず。されば、文の述語が使役相の活用連語なる場合には、その文には必ず使役相の標準をいふ語を用ゐるを要す。

天、雪を降らす。

學校は、生徒に樹を植ゑさす。

父は、われをして實業に就かしめんとす。

右の文にて、雪、生徒、われは降る、植う、就くの動作主にて、即ち使役相降らす、植ゑさす、就かしめんとすの標準なり。使役相の標準をいふには、助詞に、を、をしてなどを要す。

三

文の客語。文には、その述語たる動詞の性及び相によりて、自動の標準、他動の目的及び標準、所相及び使役相の標準をいふ語を用ゐるを要すること、上に説きたるが如し。これらの語を文の客語といふ。文の客語は、文中にありて述語の上にあるを常とす。

二七

客語の構成。文の客語は、自動の標準、他動の目的及び標準、

所相及び使役相の標準たる事物をあらはすものなれば、主語と同じく通常は體言にて、これに助詞を、に、と、をしてなどを要すること、前の諸例に見るが如し。

されば、また、すべて主語として用ゐるべき單語、連語は、客語としても用ゐることを得べし。

われは足ることを知る。

事實は傳ふるところに違はず。

かれは飢ゑたるものをして食を得しむ。

われは足るを知る。

老いたるはわかきに扶けらる。

三

客語も、主語の如くに幾つも重ねることあり。生徒は國語及び漢文を學ぶ。

下文の讀み及び
作ることとは、
讀むと作るとの
二つの用言を連
結して、更にこ
れをことなにて
れたるものにて
讀むこと及び
作ることとの二
つの客語と見る
べきものなり。

二元

次に客語を含む單文の稍複雑なるもの數例を示す。
生徒は書を読み、文を作る。
生徒は書を読み、文を作ることを學ぶ。
生徒は先生に書を読み、文を作るを教へらる。
先生は田中に書を読ませ、中島に文を作らす。
日本は乃木大將をして陸上より、東郷大將をして海上より、旅順口を攻圍せしめ、遂にこれを陥れたり。

友とわれとは、烈しき雨に降られ、あたりの森に駈け入りて、そこに雨やどりをなせり。

▲文の客語

他 動の目的及び標準
自 動の標準
所 相の標準
使役相の標準

▲單文の成立
主語 | 述語
主語 | 客語 述語

例題

次の單文の主語と述語と客語とを指示せよ。

- 一。少女花を賣る。
- 二。翁、牛に乗れり。
- 三。農夫は麥を車に載す。
- 四。朕、汝を以て股肱とす。
- 五。アメリカはコロンブスに發見せられたり。
- 六。われは友をして事情をかれに告げしめたり。

- 七。松籟は頻に琴音を弄して、遠來の客を慰むべし。
- 八。大臣、公卿悉く攝津の國福原の京に移り給ひぬ。
- 九。赤きもの、紫なるもの、金の如きもの、銀の如きもの、一時に眼界に映じ來る。
- 一〇。正行、頭を地につけて、とかくの勅答に及ばず、たゞこれを最後の參内なりと思ひ定めて、退出す。

第五章 文主

言 文主

雪は色白し。

これは一つの單文にて、「雪」につきて、その「色」の「白」きことをいふ。即ち雪は主語にて、色白しは、その述語とも見るべきものなり。然るに、色白しも一つの單文にて、色は主語、白しは述語

なり。かやうに文を述語とも見るべき場合に、これに對する主語、即ち全文の主語を、特に文主ぶんしゅといふ。前の例の雪は即ち文主なり。文主は、その述語と見るべき文の上にある。

象は體大なり。

友は家富む。

將軍、遠慮あり。

右の例の象、友、將軍はいづれも文主なり。

會計は、幹事これを掌る。

この例の會計は文主、幹事は主語、掌るは述語にて、これをは客語なり。この文を次の文と比べみて、その思想のいひあらはし方に異なるるところあるを悟るべし。

幹事は會計を掌る。

三 文主の構成。文主は、文中にありてその用全く主語と同じければ、すべて主語として用ゐるべき單語、連語は、また文主として用ゐることを得べし。文主もまた幾つも重ねることあり。杉山と服部とは成績優等なりき。

▲單文の成立
 一、主語—述語
 二、主語—客語述語

三、文主—主語—述語 文主—主語—客語述語

例題

次の單文の文主及び主語述語客語を指示せよ。

- 一。石炭は火力強し。
- 二。金剛石は産出稀なり。
- 三。壯麗比なし。

- 四。駱駝はその性、よく渴に堪ふ。
- 五。酒はわれこれを好まず。
- 六。われ、少き頃より煙霞の癖あり。
- 七。斜なるは、形臥したる牛のごとし。
- 八。幹事及び評議員は、會員これを選擧す。

第六章 文の修飾語

三 文の要素。主語述語客語及び文主は文の要素にて、その一つにても闕くるときは、文の成立せざることあるは、既に上の諸例にて見たるが如し。

三 文の修飾語

涼しき風そよよくと吹く。
 これは、一つの單文にて、主語は風、述語は吹くなり。さて、風

を形容する涼しき吹くを修飾するそよ／＼とは、いかなる語なるか。これらは、もとより文の要素にはあらず、たゞ文の要素たる主語、述語などに屬して、その意を種々に修飾する用をなすのみなり。かやうの語を文の修飾語といふ。文の修飾語も、幾つも重ねることあり。

清く涼しき風、そよ／＼と海より吹く。

修飾語には、他の修飾語を修飾するものあり。

いと清く涼しき風、そよ／＼と南の海より吹く。

すべて文の修飾語は、文中にありてその修飾する語の上にあるべし。

三

修飾語の種類。 文の要素を構成するは、體言と用言、活用連語となれば、これが修飾語には體言を修飾するものと、用言

活用連語を修飾するものとあり。而して體言を修飾するは、形容詞または形容詞に準すべき語にて、用言、活用連語を修飾するは、副詞または副詞に準すべき語なり。されば修飾語には、形容詞的修飾語と副詞的修飾語とあるなり。

三

形容詞的修飾語の構成。 形容詞的修飾語には、動詞、形容詞、

活用連語の連體形にて成れるものあり。

滔々たる雄辯は、列席せる判檢事及び竝み居る傍聽人に深き感動を與へたり。

この場合の修飾語には、他動の目的及び標準、自動、所相、使役相の標準を伴ふことあり。

花を見る人、山に入る日ををしむ。

われは途にて家を郊外に移す友にあへり。

驚に迫はれたる雀は、檐の下に隠れたり。
客を樂しましむる設備は、既に整へり。

三 形容詞的修飾語は、またが、の、よりなどの助詞と連結せる體
言または體言に準すべき連語などにて成ることあり。

これより北は、わが校の敷地なり。

東京よりの通信は、對手國との交渉を悲觀せり。

席上にての相談は、濟生會への寄附の事なりき。

三 二 三 二 三 二 三
に於けるといふ連語は、一つの助詞の如くに、また形容詞的
修飾語を構成するに用ゐらる。

世界に於けるわが國の位置は、ますく重くなれり。

三 二 三 二 三 二 三
副詞的修飾語の構成。副詞的修飾語には、副詞にて成れる
ものあり。

絶えずうち寄する浪は、遂にさしも固き巖を穿てり。

四 三 二 三 二 三 二 三
副詞的修飾語は、また助動詞で、ごとく、助詞ば、ともども、に、を、

へ、と、より、まで、にて、として、など、に連結せる用言、活用連語及

び體言またはこれらに準すべき連語にて成ることあり。

かれ愧ぢて答へず。

民、子のごとく來る。

物、盛なれば必ず衰ふ。

死すとも、退くことなかれ。

打てども、馬進まず。

父は大阪に行きたり。

行くに汽車あり。

小川家の前を流る。

船は東へ走る。

彈丸、霰と飛び來。

友、遠方より來る。

かれは十日まで休む。

人々は學校にて談話會を開く。

一人として反對したるものなかりき。

君、この書を見れば直に來れ。

景によりて情起る。

四 動作の起る時間、位置などを示す副詞的修飾語に要する助詞には、屢省略せらるゝことあり。

午前五時に一同起き出づ。

明治三十八年五月二十八日に日本海大海戦あり。

就業中には人々喫煙すべからず。

この時にわれ東京にありき。

今より後には、さる虞なからん。

南方の海上に、かすかに煤煙たなびく。

三 に於て、を以てといふ連語は、一つの助詞の如くに、また副詞的修飾語を構成するに用ゐらる。

この點に於て、雙方の意見は相一致せり。
會員は無記名投票を以て幹事を選擧す。

▲文の要素
主語 述語
文主 答語

▲文の修飾語
形容詞的修飾語
副詞的修飾語

例題

次の文に成るべく多く修飾語を加へよ。

- 一。海見ゆ。
- 二。風涼し。
- 三。月明なり。
- 四。呉服店は冬物を賣り出せり。
- 五。會長はメダルを優勝者に與へたり。
- 六。南極探検隊は學生に歓迎せられたりき。
- 七。大臣は祕書官をして旨を委員に傳へしめき。
- 八。山は形富士山のごとし。

第七章 單文の解剖

三

主部、述部、客部、文主部。 文の主語とこれに屬する修飾語とを**主部**と**總稱**し、**述語**とこれに屬する修飾語とを**述部**と**總稱**し、**客語**とこれに屬する修飾語とを**客部**と**總稱**し、**文主**と

四

これに屬する修飾語とを**文主部**と**總稱**す。
文の解剖。 文を解きてこれを**主部、述部、客部、文主部**となすことを得べし。かやうにすることを**文の解剖**といふ。
 次に單文の解剖の例を示す。

今年咲きたる菊は、花の形、極めて美しかりき。

文主部 今年修飾語 咲きたる修飾語 菊は主語

主部 花の修飾語 形主語

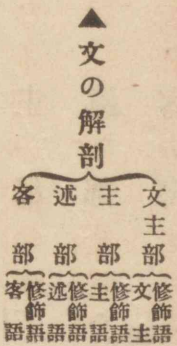
述部 極めて修飾語 美しかりき述語

今や天下の士民漸くその自省の志を立てんとす。

主部 天下の修飾語 士民主語

述部 今や修飾語 漸く修飾語 立てんとす述語

客部 その修飾語 自省の修飾語 志を客語



例題

次の文を解剖せよ。

- 一。社會は善惡正邪の戰場なり。
- 二。西郷實にその巨魁たり、謀主たり。
- 三。君の心事まことに悲しからずや。
- 四。治承四年の水無月の頃、俄に都うつりありき。
- 五。精確なる科學的知識は、なほ銳利なる器械の如し。
- 六。この盛時に遭ひまつれる臣民、いかでか進みて報效を圖らざるべき。
- 七。わが兵士は、近年、外國における數度の戰爭において、人目を眩

- 八。傳奏未だ奏せざる前に、まづ直衣の袖をぞ濡しける。
- 九。頼朝鎌倉に入りしより、既に自家を經營する志あり。
- 一〇。人倫の變に臨んで、秋霜烈日の如き志氣を奮興せしむるもの、武士道に若くはなし。

第八章 句 復文

豊句

櫻の咲く頃は、年中の好時節なり。
 櫻咲けば、人來り遊ぶ。

前なる例の櫻の咲くは、その文の主語頃に屬せる修飾語にて、後なる例の櫻咲けばは、その文の述語來り遊ぶに屬せる修飾語なり。さてこれらの修飾語

櫻の咲く、

櫻咲けば

は、共に

櫻咲く

といふ單文を、一つは述語咲くは連體形を用ゐて形容詞的修飾語となせるもの、一つはこれに已然形を用ゐて助詞ばに接せしめて副詞的修飾語となせるものなり。かやうに文のその獨立を失ひて、他語に附屬し、これと共に文の一部分を成せるものを、特に句といふ。

四

形容詞的句。 前の例の

「櫻の咲く頃は、年中の好時節なり。」

の如く、形容詞的修飾語となれる句を、形容詞的句といふ。

文を變じて形容詞的句とするには、その述語たる用言活用連語に連體形を用ゐる。なほ左に數例を示す。

月の明なる夜、われは舟にて河を下りぬ。

友は行の極めて正しき人なり。

伯母は色の飽くまで白き小猫を飼へり。

わが始めてかれを知りしとき、かれは京都にありき。

形容詞的句のこと、ものなどに屬するものには、そのこと、ものなどを併せて、これを一つの句と見るべきものあり。

櫻の咲くことは疾し。

成績の優等なるものは特待生となる。

輸出品にて價額の千萬圓を超ゆるものも、數多し。

新聞紙は震災の甚だしかりしことを報ぜり。

五

生徒は先生の職を辭せらるゝことを悲しめり。
 觀る人は皆建築の宏壯なることに驚けり。
 識者は女子が猥に都下に遊學することの弊害を痛論せり。

これらの場合にはものごとを略して、

「櫻の咲くは疾し。」

「成績の優等なるは特待生となる。」

「輸出品にて價額の千萬圓を越ゆるも數多し。」

「新聞紙は震災の甚だしかりしを報ぜり。」

「生徒は先生の職を辭せらるゝを悲しめり。」

「觀る人は皆建築の宏壯なるに驚けり。」

「識者は女子が猥に都下に遊學するの弊害を痛論せり。」

などとやうに、句をそのまゝ名詞として用ゐること多し。かやうの句を特に名詞的句ともいふ。前の例の初の二つは、名詞的句が主語として、次の一つは名詞的句が文主として、次の二つは名詞的句が客語として、後の二つは名詞的句が修飾語として、いづれも用ゐられたるなり。

只 副詞的句。

櫻咲けば、人來り遊ぶ。

この例の櫻咲けばは、副詞的修飾語となれる句なり。かやうの句を副詞的句といふ。文を變じて副詞的句とするには、その述語たる用言活用連語に連用形を用ゐ、またはこれを助詞ば、ともどもに、を、とより、まで、としてなどにて承く。なほ左に數例を示す。

霜は木々の梢を色うるはしく染め出せり。

學生は、水の低きに就くが如く先生の門に集れり。

將軍年老いて元氣ますく盛なり。

汝行くとも、かひなからん。

價貴けれども、品は精良なり。

われは再び友を訪ひしに、友在らざりき。

われらがこの校に入りしより、三年はたちぬ。

弟は、おのれ嚮導たらんと、眞先に進む。

文の述語が、なりたりに終る形容動詞なるときは、複合せる動詞ありを略して、直にこれを副詞的句とすることあり。

校長は聲さわやかに訓辭を讀みたり。

原告は條理井然と控訴の理由を陳述せり。

四

複文。

すべて句を含む文は、その文の主語と述語との間に文法上の關係の存する外に、なほ句の主語と述語との間にも、同様の文法上の關係成立す。さればかやうの文にては、主語と述語との間の文法上の關係重複せり。句を含みて、主語と述語との關係の重複せる文を複文といふ。左に複文の稍複雑なるもの數例を示す。

夜の明くる頃、われらは海上無事にかの地に著きぬ。

時既に遅ければ、汝行くとも、かひなからん。

わがこの靴を買ひしときは、價貴かりしかど、品は精良なりき。

われらが教室に入りて席に就きたる後、程なく視學官と校長と來りて、われらの書を讀むを聽きたり。

吾句と連語との別。

風吹く。

人、書を読む。

童、牛に乗る。

先生、業を弟子に授く。

盗、警吏に捕へらる。

老人、女兒をして餌を金魚に與へしむ。

これらは、皆單文なり。今その構成を變じて、述語たる用言、活用連語をして主語または客語たる體言に屬してその意を形容せしむるときは、次の如くなるべし。

吹く風。

書を読む人。人の読む書。

牛に乗る童。童の乗る牛。

業を弟子に授くる先生。先生が弟子に授くる業。先

生が業を授くる弟子。

警吏に捕へらるゝ盗。

女兒をして餌を金魚に與へしむる老人。老人が女兒

をして金魚に與へしむる餌。老人が女兒をして餌を

與へしむる金魚。老人が金魚に餌を與へしむる女兒。

これらは皆連語なり。これらの連語を構成する語のうちにて、傍線を施したるものは、いづれも主語と述語とを具へて、一つの句を成せるが如く見ゆれど、文の成立に必要な客語を闕くが故に、もとより文を成さず。随つてまた句を成すことなし。さればこれらをすべて連語と見る。

五 複文の解剖

左に複文を解剖する一例を示す。

わが再び還り來ん日は、即ち功の成りたらん時なり。

主部 わが再び還り來ん 句修飾語 日は主 語主

わが主 語主

句 再び 句修飾語 還り來ん 語述

述部 即ち 句修飾語 功の成りたらん 句修飾語 時なり 語述

功の主 語主

句 成りたらん 語述

▲句 形容詞的句—名詞的句
副詞的句

▲言語 單語
連語
文—句……

▲文 單文
複文
……

例題

次の複文を解剖せよ。

- 一。雨降りて地固まる。
- 二。漢の高祖の天下を取りしは、蕭何張良韓信が力なり。
- 三。はじめに平氏の兵威を摧きしは、義仲が功なり。
- 四。風雅の嗜あるものは、おのづから餘裕あり。
- 五。社會の面目の一新せること、古來稀に見るところなり。
- 六。日は入りしほどに、山深き夜のさま常ならず。
- 七。外客の瀬戸内海を過ぐるもの、風光の明媚なるを見て、世界の遊園の稱の眞に空しからざるを知る。
- 八。われ、ことに君を知る深きが故に、君のために悲しむ心、また切なり。
- 九。その一種の道義として、わが國の文明に關係ある、決して少々にあらず。
- 一〇。天業の恢弘せる、今日の如きは、千古に亙りていまだ有らざる所なり。

第九章 節 重文

三 重文。

月落ち、鳥啼く。

これは、次の二つの同趣の單文を連結して作れる文なり。

月落つ。鳥啼く。

かやうに同趣の文を連結して作れる文を、重文じゆうぶんといふ。

三 節。重文を構成せる一つくゝの文を、特に節せつといふ。

葉出で、莖伸び、蕾生じ、花咲き、蟲來り、遂に實なる。

この一つの重文は、六つの節にて成れるなり。

五 重文の構成。節を連結して重文を構成するには、上なる節

の述語たる用言、活用連語に連用形を用ゐる、

五

「雨降り、風吹く。」

「空高く、氣清し。」

「衆山は波濤の如く、大海は青疊を敷きたるが如し。」

助動詞すけどうごてまたは助詞すけごしてによりて兩節を連結し、

「霜は軍營に満ちて、秋氣清し。」

「峰の白雪深くして、谷の氷も解けざりけり。」

「四季の花斷えずして、遊覽の車常に門前に竝べり。」

また述語じゆごがなりたりに終る形容動詞けいようどうごなるときは、複合せる

動詞どうごありを略し、或はかやうに略したるものにて、またはし

てを加へ、

「月明に、星稀なり。」

「浪穩にて、沖の方に釣舟多く見ゆ。」

「旅館の燈火幽にして、鶏鳴曉を催す。」

「山は峨々として、水は洋々たり。」

述語が體言と助動詞なりとにて成れる連語なるときは、またそのなりを略して、にてまたはにしてを加ふ。

「父は有名なる實業家にて、子は工學博士なり。」

「生絲はわが重要産物にして、その輸出額最も多し。」

五 節の述語が時及び完了の助動詞に終る活用連語なるときは、重文を構成するに、上なる節の述語に屬するこれらの助動詞を略したる上にて、下なる節に連結すべし。

人民安堵し、戸口蕃殖せり。

秀吉は秀家をして大將たらしめ、清正、行長をして先鋒たらしめき。

雨も降らず、風も吹かざらん。

五 重文の解剖 左に重文を解剖する一例を示す。

波の音常にかまびすしくて、鹽風特にはけし。

波の修飾語音主

第一の節

主部
述部

常に修飾語かまびすしくて述

鹽風主

第二の節

主部
述部

特に修飾語はけし述

五 複雑なる構成の文。

現御神の君、明德愈遠くして、威稜五洲の外に振ふ。

この文の「明德愈遠くして、威稜五洲の外に振ふ」は一つの重文なり。されど獨立せるにはあらずして、「現御神の君」はこれに對して文主部たる位置にあり。されば、この文は文主を

含める一つの單文にて、その述部と見るべきは、即ち一つの重文なり。

日出づる所の國、版圖益、廣がりて、光華六合に遍し。

この文の「版圖益、廣がりて、光華六合に遍し」も一つの重文にて、これに對して「日出づる所の國」は文主部たる位置にあり。さてこの文主部は「文主、國」とこれに屬する修飾語「日出づる所の」とにて成れるものにて、この修飾語には「日出づる」といふ形容詞的句を含めり。されば、この文は文主部を含める一つの複文にて、その述部と見るべきは、一つの重文なり。

烽火絶えくゞに、旌旗、地に委して、一卒の關をまもるものなし。

この文は「烽火絶えくゞに」と「旌旗、地に委して」と「一卒の關を

まもるものなし」との三つの節にて成れる重文なり。さて第一の節「烽火絶えくゞに」の主部は「烽火」にて、述部は複合せる動詞「あり」を略したる形容動詞「絶えくゞ」なり。第二の節「旌旗、地に委して」の主部は「旌旗」にて、述部は「委して」、客部は「地」なり。第三の節「一卒の關をまもるものなし」の主部は「一卒の關をまもるもの」にて、述部は「なし」なり。この主部は「一卒の關をまもる」といふ形容詞的句の「もの」に屬するものにて、この「もの」を併せて一つの句と見るべきものなり。されば、この節は形容詞的句を含める複文の變じて成れるものなり。

▲言語連語
單語
文句節

▲文複文句を含むもの
單文
重文節にて成れるもの

▲句 單文の變じたるもの
復文の變じたるもの
節 重文の變じたるもの

▲文主部に對する述部 單文にて成れるもの
復文にて成れるもの
重文にて成れるもの

例題

次の諸例に就きて、單文と複文と重文との別を立て、さて後に解剖せよ。

- 一。故郷は既に荒れて、新都是未だ成らず。
- 二。なほ空しき地は多く、造れる家は少し。
- 三。その後、世しづまりて、文治の頃、敕撰あり。
- 四。群品おのゝ、時雨の化に霑ひ、萬民皆天日の光を仰ぐ。
- 五。平原こゝに盡き、山勢突兀として、天を支ふる壁の如く、平原と直角をなして、前方を塞ぐ。
- 六。雨風烈しく、道闇くして、敵の関の聲こゝかしこに聞えけり。
- 七。わが國は有名なる山國にして、登臨を試るべき丘陵、山嶽は、吾等の前に屹立して、選擇を待てり。
- 八。あらゆる功臣多く滅びしかど、張良は身を全くしたりき。

九。蝶の花に飛びかひたる、やさしきものの限なるべし。

一〇。晚暉既に收り盡くして、星光水に落ち、樹木なく、岩石なく、たゞ灰の如き微塵砂より成れる兩岸は、摸糊として一線を描きぬ。

第十章 文の要素の省略及び倒置

五 文の要素の省略。主語、述語及び時として、客語は、いづれも文を構成するに闕くべからざるものなれど、言外にそれと推せらるゝ場合に限りて、これを省略することあり。

五 主語の省略。國語には、主語を省略すること、少からず。

(われは)今朝五時に起きぬ。

(吾人は)何をか武士道といふ。

(汝等)こゝに來れ。

(人々は)出品に手を觸るべからず。

本店は(當會社)これを東京に置く。

殊に對話の文、命令の文などにては、主語は容易に推せらるるが故に、これを省略するが常なり。また文を幾つも連ね用ゐて文章を編む場合には、その文意より推して主語を知ること難からざるが故に、便宜にこれを省略するなり。

(われは)庚子四月十五日の朝、杜鵑はじめて鳴くを聞く。

(この日は)立夏後十日なり。去年は(杜鵑)立夏の日より鳴きぬ。

六 述語の省略

この良夜をいかに(せん)。

その理由はいかに(あらん)。

北部は麥を(出し)、南部は茶を出す。

兄は大阪にて(生まれ)、妹は東京にて生まれたり。

述語が體言と助動詞なりとにて成れる連語なるときは、そのなりを省略することあり。

勉強は幸福の母(なり)。

かやうの述語を含める文が節となりて、なりを略してにてまたはにしてを加へたるものにては、またそのにてにしてをも省略することあり。

父は有名なる實業家(にて)、子は工學博士なり。

六 客語の省略

われひとりこれを斥けて、(それを)然らずとす。

頼朝速にその兵權を奪ひて、(これを)召し還す。

二十一人は(學校長に)入學を許されたり。
 安倍野の合戦は霜月二十六日の事なれば、渡邊の橋より堰き落されて、流るゝ兵五百餘人、かひなき命を楠木に助けられて、(楠木に)川より引き上げられたれども、秋の霜、肉を破り、曉の氷、膚に結んで、(人々)生くべしとも見えざりけるを、楠木情ある者なりければ、(人々に)小袖を(別のものに)脱ぎ更へさせて、身を暖め(しめ)、(人々に)藥を與へて(人々をして)疵を療せしむ。
 東京は(世人)昔(これを)江戸といへり。

三 文の要素の倒置。一つの文のうちにて、主語は上にあり、述語は下にあり、客語はその間にあるが常なれど、これらのうちにて主眼とする語をば、特に首に置くことあり。

仰けば尊し、わが師の恩。
 曉に見る、千兵の大牙を擁するを。
 かの地の異なる風をわれに友は告ぐれば、友にわれは故郷のありしことどもを語り聞かせぬ。

例題

次の文に省略したる要素を補ひて、これを解剖せよ。

- 一。精神は本器械は末なり。
- 二。富士山は甲斐と駿河との境にありて、東海第一の名山と稱せらる。
- 三。連嶺悉く旭光に浴せる時、なほ背後に一大黒峰の屹然として立てるを見る。
- 四。知己なくば、人生は荒野のみ、荆棘のみ。
- 五。恍惚として立つこと、一時餘。

六。かれに一人の弟あり、武夫といひ、現に陸軍歩兵少尉たり。
 七。讀者は、選擇を忘れ、作者は推敲を忘れ、相率ゐて没趣味の裏に
 投ぜんとす。

八。これを覺醒せんとするには、いかにすべき。

九。一年を経ざる著作は、讀むことなかれ。

一〇。思ひきや、君の今日あらんとは。

一一。問ふをやめよ、この少年の前途の如何を。

第十一章 文の四體 結法

三

文の四體。文は、その敘述の形式の上より、平敘體、疑問體、命令體、感動體の四體に分つことを得。

四

平敘體。平敘體の文とは、敘述の形式の尋常なるものにて、單に事物を説明せるものなり。

風烈しく吹く。

寒さいと強し。

梅の花咲きたり。

五

前の例に見るが如く、通常の平敘體の文を結ぶには、その述語たる動詞、形容詞、活用連語に終止形を用ゐる。されど、文中に、ぞ または なむ の助詞を用ゐたる場合には、用言助動詞 の連體形にて結ぶを法とす。

風ぞ烈しく吹く。

寒さいとぞ強き。

梅の花なむ咲きたる。

また文中にこそ の助詞を用ゐたる場合には、用言助動詞 の已然形にて結ぶを法とす。

風烈しくこそ吹け。

寒さこそいと強けれ。

梅の花こそ咲きたれ。

亥

疑問體。

疑問體の文とは、文中に疑ふ意の語または助詞か、
やを用ゐて、敘述に疑ふ意をあらはせるものなり。

この問題の解決は、いかならん。

かれ何人ぞ。

梅の花は咲きたるか。

汝これを知れりや。

夜や明くる。

いづれか尊き。

蝶はいづこへか行きし。

壬

前の例に見るが如く、疑問體の文を用言助動詞にて結ぶに
は、その連體形を用ゐるを法とす。

亥

疑問體の文には、反語となりて、疑ふ意の變じて確むる意と
なれるものあり。

香やは隠るゝ。

何の益かあらん。

君の心事まことに悲しからずや。

反對論者は、この事實をさへ無視することを得るか。

充

命令體。

命令體の文とは、述語に命令形の用言助動詞を用
ゐ、または文中に禁止の意の助詞なを用ゐて、敘述に命令の
意をあらはせるものなり。

汝行け。

次の問に答へよ。

決して退くことなかれ。

われをして聊か所見を述べしめよ。

油断すな。

門をな開かれ候ひそ。

七

感動體。感動體の文とは、述語に感動の助詞かな、か、や、よなどを
用ゐて、敘述に感動の意をあらはせるものなり。

脆きは、人の心なるかな。

庶幾はくは大過なきを得んか。

春風の吹くよ。

來ること何ぞ遅きや。

その勢いかに烈しかりしよ。

七

右の終の二例に見るが如く、疑問體の文も、その述語に更に感動の助詞を加へて、感動體の文となすことを得。

感動體の文には感動詞を伴ふことあり。

嗚呼、天道の冷酷無情一に何ぞこゝに至るや。

七

あはれ、この殿は大剛の人かな。

梅の花咲きたれば平敘體の句庭のながめ改りぬ。

われは、故郷の友に梅の花は咲きたるか疑問體の句を問ふ。

父はわれに汝行け命令體の句と命じたまへり。

かれは嘆じて、脆きは人の心なるかな感動體の句といへり。

七

句の結法もまた文の結法に従ふ。

妹は寒さいとぞ強きといふ。

友梅の花こそ咲きたれと告ぐ。
人々、夜や明くると疑ふ。

六

複文の體。複文の體は、専らその主たる文の敘述の形式によりて定まり、その含める句の體には關らず。されば、前に挙げたる諸例の複文は、皆平敘體なり。

梅の花咲きたるに、鶯はなか來鳴かぬ。

汝行けと命ぜられしを、何ぞ速に起たざる。

これ、平敘體の句、命令體の句を含める疑問體の複文なり。

機既に熟したれば、人々努力せよ。

かれとこれとは、いづれ優れるかをいへ。

これ、平敘體の句、疑問體の句を含める命令體の複文なり。

七

複文の結法は、専らその主たる文の結法に従ふ。

隊長、たれかこれを能くすると、問ひも果てぬに、一人の勇士、われこそ試るべけれど、つと起ちあがり。

この説を疑ふ人もやあるべけれど、根據は確なり。

かの文こそ然るべきに、選者はこれを何とか見たる。

當時、何人か君の今日あるを豫想せし。

この日こそ、御國の基の定まりしめでたき日なれ。

八

重文の體。節にも種々の體あり。重文の體は、これを構成する終の節の體によりて定まる。

雨強く降り、風烈しく吹く。

春と秋とはいづれが美しく、花と月とはいづれが美し

さか。

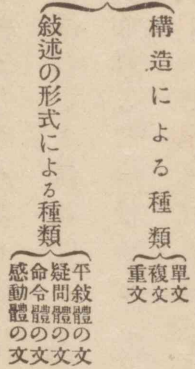
松山はその章を朗讀し、竹村はそれを解釋せよ。

この例の初なるは平敘體の重文、中なるは疑問體の重文、終なるは命令體の重文なり。

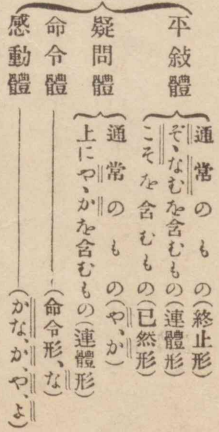
七 重文にては、たゞ終の節のみ定まれる結法に従ふ。

この人こそ一代の學者にて、その教は後世を益せり。

▲文



▲結法



例題

次の文の體を辨じ、結法を説明し、さてこれを解剖せよ。

- 一。何をか英雄といふ。
- 二。朝敵をほろぼし、君を御代に即け参らせよ。
- 三。軍人は忠節を盡すを本分とすべし。

四。世に仕ふる程の人たれか、獨り故郷に残り居らむ。

五。口惜しと思ふ人もやあらん。

六。これあに臣たる者のしわざならんや。

七。この輩また何をか爲すを得んや。

八。その死せしとき、誰れかかれを讒せし。

九。風雅の嗜あるものは、いかなる場合にも樂あり。

一〇。幾たびも尋ねたれど、何等の答もなかりき。

一一。希はくは、今よりかくの如くにして、わが世を終へんかな。

一二。日々に毀ちて、川も流れあへず、運びくだす家は、いづくに造れるにかあらん。

一三。この世のわかれこそ、たゞ今ばかりにて候ふとも、來世には必ず一所に参り合ふべし。

一四。ひとり燈火の下に文をひろげて、見ぬ世の人を友とするこそ、こよなう慰むわざなれ。

- 一五。五月の闇はたゞこの物のためにやとまでぞ覺ゆる。
- 一六。張儀の功を成せるは、巨口を張開して、わが舌なほありやといひしところにある。
- 一七。君の心事を知るもの、ひとり僕のみにあらざらん。
- 一八。苔の下にも埋れぬ物とは、たゞ徒に名をのみぞ留めし。
- 一九。自然の事もあらば、人手に懸くな。汝が手に懸けてわが首をば急ぎ取れ。
- 二〇。國も破れ、家も亡びて、その名のみこそ聞ゆれ。何ものか世には残らむ。哀に悲しき業ならずや。

新定 日本文典 終
教科

附録 假名遣大要

音の相似たる假名

一 一とゐと、えとゑと、おとをと、じとぢと、ずとづとなどは、その音相似たり。されば假名にて言語を書くときには、これらの假名は相紛る。

音の轉じたる假名

二 例へば、花は笑ひ、鳥は歌ふといふ文章にて、ははワ、ひはイ、ふはウとやうに、その音いづれも轉じたり。なほと書きて、なオといひ、東へと書きて、東エといふなども、この例なり。かやうには、ひふへ、ほの音は、他の音の下にあるときは、ワ、イ、ウ、エ、オの音に轉ずることあり。

また、か(寛)うてと書きて、コ(工)うてといひ、ゑ(醉)ふと書きて、ヨ(ヨ)ウといふが如く、ア列、エ列の音は、その下ウの音に連なりて、オ列の音に轉ずることあり。

これらの語は、その音は既に變りたれど、なほ、もとのまゝの文字を用

ゐ來れるなり。されば、かやうの語を假名にて書くときには、今の音を寫す假名と、前より用ゐ來れる假名とは相紛る。

三 **假名遣** 相紛るゝ假名を正しく用ゐ分くる法を假名遣といふ。その語が本來の國語なると字音なるとによりて、國語假名遣と字音假名遣とあり。假名遣を知るには、例へば相紛るゝ假名いゐひにては、いとゐとを用ゐるべき語のみを覚えおき、その他はひを用ゐるとやうにするなり。

第一章 國語假名遣

一 いゐひ

四 **いゐひの相紛るゝ場合** いとゐとは、その音相似、またひは他の音の下にあるときは、イの音に轉ずることあり。されば、いとゐとはいづこにありても相紛れ、ひは一つの語の中または尾にありては、いゐと相紛る。

五 **ゐの假名を用ゐる語**

およそ次の如し。

(一) 一音のもの、および首はしらにゐと書くべきもの。

- ▲ゐ(井) ▲ゐ(堰) ▲ゐ(猪、亥)
- ▲ゐ(麴) ▲ゐ(もり) 鱒(鱒) ▲ゐ(居)
- ▲ゐ(なか) 田(田) ▲ゐ(ざり) 麩(麩)

(二) 中にゐと書くべきもの。 ▲もちゐる(用) ▲まゐる(參)

(三) 尾にゐと書くべきもの。 ▲ま(と)ゐ(圓)居 ▲も(と)ゐ(基)

- ▲くらゐ(位) ▲ま(と)ゐ(圓)居 ▲も(と)ゐ(基)
- ▲あぢ(さ)ゐ(紫陽花) ▲くれ(な)ゐ(紅) ▲く(わ)ゐ(慈姑)
- ▲あ(ゐ)ゐ(藍) ▲かた(ゐ)ゐ(食)

六 **ゐの假名を用ゐる語**

およそ次の如し。

(一) 一音のもの、および首はしらにいと書くべきもの。 一音の語および一つの語の首には、前に擧げたるゐと書くべき

ものの外は大抵いと書くべし。

(二)尾にいと書くべきもの。

▲かい(權)

▲おい(老)

▲くい(悔)

▲むくい(報)

(三)上にいへるものの外

一。すべて音便にていと書くべきもの。

二。「善い」「高い」「美しい」「楽しい」などの類の口語。

七 **ひの假名を用ゐる語**

一つの語の中と尾とにては、前に擧げたるゐま
たはいを用ゐるべきものの外、大抵ひを用ゐるべし。

二 う ふ

八 **うふの相紛るゝ場合**

ふは他の音の下にあるとき、ウの音に轉ずるこ
とあり。されば、うとふとは一つの語の中または尾にありては相紛
る。

うの假名を用ゐる語

およそ次の如し。

(一)尾にうと書くべきもの。

▲うう(種)

▲うう(飢)

▲すう(据)

(二)上にいへるものの外

一。すべて音便にてうと書くべきもの。

二。口語の「行かう」「見よう」などの類の「う」「よう」。

二〇 **ふの假名を用ゐる語**

一つの語の中と尾とにては、前に擧げたるうを
用ゐるべきものの外、大抵ふを用ゐるべし。

三 え ゑ へ

二 **えとゑの相紛るゝ場合**

えとゑとは、その音相似、またへは他の音の下
にあるときは、エの音に轉ずることあり。されば、えとゑとは、いづこ
にありても相紛れ、へは一つの語の中または尾にありては、えとゑと相
紛る。

三

ゑの假名を用ゐる語

およそ次の如し。

(一)一音のもの、および首にゑと書くべきもの。

▲ゑ(餌)

▲ゑづく(嘔吐)

▲ゑそ(鱧)

▲ゑふ(醉)

▲ゑむ(笑)

▲ゑくぼ(壓)

▲ゑる(彫)

▲ゑぐる(剝)

▲ゑぐし(酸)

(二)尾にゑと書くべきもの。

▲うる(種)

▲うる(飢)

▲する(据)

▲こゑ(聲)

▲する(末)

▲こざる(梢)

▲いしずる(礎)

▲つくる(机)

▲つる(杖)

▲ゆる(故)

三

えの假名を用ゐる語

およそ次の如し。

(一)一音のもの、および首にえと書くべきもの。

一音のものおよび一つの語の首には前に挙げたるゑと書くべきものの外は、大抵えと書くべし。

(二)中にえと書くべきもの。

▲ひえ(どり(鴨))

▲おびえ

▲おぼえ(覺)

(三)尾にえと書くべきもの。

▲いえ(癒)

▲おびえ

▲おぼえ(覺)

▲きこえ(聞)

▲きえ(消)

▲こえ(肥)

▲こえ(越)

▲こぞえ(凍)

▲さかえ(榮)

▲さえ(冴)

▲しなえ(萎)

▲そびえ(聳)

▲たえ(絶)

▲つひえ(潰(費)(弊))

▲なえ(痿)

▲はえ(生)

▲はえ(映)

▲ひえ(冷)

▲ふえ(殖)

▲ほえ(吼)

▲まみえ(見)

▲みえ(見)

▲もえ(燃)

▲もえ(萌)

▲ふえ(笛)

▲さざえ(榮螺)

▲ぬえ(鶴)

▲はえ(籠)

▲ひえ(禪)

▲きのえ(甲)

二四

への假名を用ゐる語

一つの語の中と尾とにては前に挙げたるゑま

たはえを用ゐるべきものの外、大抵へを用ゐるべし。

四 おをほ

五

おをほの相紛るゝ場合

おとをとはその音相似、または他の音の下にあるときは、オの音に轉ずることあり。されば、おとをとはいづこにありても相紛れ、ほは一つの語の中または尾にありては、おをと相紛る。

六

をの假名を用ゐる語

およそ次の如し。

(一) 一音のもの、および首にをと書くべきもの。

- ▲を雄(男)夫。 ▲を麻。 ▲を緒。
- ▲を尾。 ▲を峯。 ▲を小。
- ▲を花(を)などのを。 ▲をか(阿)。 ▲をか陸。
- ▲をかし(可笑)。 ▲をがむ(拜)。 ▲をぎ(莪)。
- ▲をけ(補)。 ▲をこ(廻)。 ▲をこ(ぜ)騰。

▲をさ(箴)。

▲をさ(長)。

▲をさ(な)し(幼)。

▲をさ(まる)をさ(む)治(修)。

▲をさ(まる)をさ(む)收(藏)。

▲をさ(く)天(抵)。

▲をし(き)折(敷)。

▲をし(を)し(む)惜。

▲をし(どり)鴛(鴦)。

▲をし(へ)教。

▲をち(遠)。

▲をぢ(伯)父(叔)父。

▲をと(つ)ひ(二)昨日。

▲をと(し)二(昨年)。

▲をと(と)夫。

▲をと(こ)男。

▲をと(め)少女。

▲をと(り)廻。

▲をど(し)織。

▲をど(る)踊。

▲をの(せ)。

▲をの(く)慄。

▲をは(る)を(ふ)終。

▲をば(伯)母(叔)母。

▲をひ(甥)。

▲をみ(な)へし(女郎)花。

▲をめ(く)叫。

▲をり(檻)。

▲をり(時)。

▲をり(居)。

▲をる(折)。

▲をろ(ち)蛇。

(二) 中にをと書くべきもの。

- ▲あをむく(仰) ▲かをり(香) ▲しをり(栗)
 - ▲しをる(萎) ▲たをやめ(手弱女) ▲まをす(申)
 - ▲やをら(徐) ▲わざをぎ(俳優)
- (三)尾にをと書くべきもの。
- ▲あを(青) ▲いさを(功) ▲うを(魚)
 - ▲かつを(鰹) ▲さを(竿) ▲さつを(獵夫)
 - ▲とを(十) ▲ますらを(壯士) ▲みを(櫻)
 - ▲みさを(櫻)

二七

おの假名を用ゐる語

一音の語、または一つの語の首にては、前に擧げたるをを用ゐるべきもの外、大抵おを用ゐるべし。

二八

ほの假名を用ゐる語

一つの語の中にて、オとやうにいふふの假名を用ゐるものあり。即ち

- ▲あふぐ(仰) ▲あふぐ(扇) ▲あふる(扇)
- ▲あふひ(葵) ▲たふす、たふる(伏)

されば、これらと前に擧げたるをを用ゐるべきものとの外は、一つの語の中と尾とにては、大抵ほを用ゐるべし。

五 は わ

二九

はわの相紛るゝ場合

はは他の音の下にあるとき、ワの音に轉ずることあり。されば、はとわとは、一つの語の中または尾にありては相紛る。

三〇

わの假名を用ゐる語

およそ次の如し。

(一)中にわと書くべきもの。

- ▲あわたゞし、あわつ(周章) ▲いわし(鱈)
- ▲うわる(植) ▲かわく(乾、渴) ▲くわる(慈姑)
- ▲ことわざ(諺) ▲ことわり(斷、理) ▲こわいろ(聲色)
- ▲さわがし、さわぐ(騒) ▲すわる(坐) ▲さわやかに(爽)
- ▲しわざ(爲業) ▲すわる(坐) ▲たわむ(撓)

- ▲たわやめ(手弱女) ▲はらわた(眼) ▲ゆわう(硫黄)
 - ▲よわし(弱)
- (二)尾にわと書くべきもの。
- ▲あわ(泡) ▲くつわ(轡) ▲くるわ(塵)
 - ▲しわ(皺)

三 **はの假名を用ゐる語** 一つの語の中と尾とにては、前に擧げたるわを用ゐるべきものの外、大抵はを用ゐるべし。

六 **じ ぢ**

三 **ぢぢの相紛るゝ場合** じとぢとは、その音相似たれば、いづこにても相紛る。

三 **ぢの假名を用ゐる語**

およそ次の如し。

- (一)一音のもの。
- ▲じ(讀まじなどの)

(二)中にじと書くべきもの。

- ▲いちぢる(し著) ▲かぢか(鯨) ▲かぢく(萎、畏寒)
 - ▲かぢる(嚙) ▲かたぢけなし(唇)
 - ▲くぢく(揜) ▲くぢる(揜) ▲こぢり(鱧)
 - ▲さぢき(假床) ▲しぢみ(蜆) ▲つむじかぜ(旋風)
 - ▲なじみ(馴染) ▲なじる(詰) ▲なまじひ(愁)
 - ▲にぢむ
 - ▲にぢる(蹶) ▲はぢく(彈)
 - ▲はぢかみ(椒) ▲はじまる、はじむ(始)
 - ▲ひぢき(鹿尾菜) ▲まじなひ(呪) ▲まじはる、まじふ(交)
 - ▲まじる(雜、交) ▲まなじり(眦) ▲みじかし(短)
 - ▲むじな(鰓) ▲やじり(鱧) ▲ひじり(聖)
- (三)尾にじと書くべきもの。
- ▲あるじ(主人) ▲うじ(蛆) ▲おなじ(同)
 - ▲きぢ(雉) ▲くぢ(鱈) ▲さぢ(匙)

- ▲すさまじ。
 - ▲つじ辻。
 - ▲つゝじ脚躑。
 - ▲とじ主婦。
 - ▲にじ虹。
 - ▲はじ櫃。
 - ▲ひつじ羊未。
 - ▲いみじ甚。
 - ▲まじ。
- (四)上にいへるものの外、信じ、生じなどすべて連濁にてじと書くべきもの。

二四

ぢの假名を用ゐる語

前に挙げたるじを用ゐるべきものの外、いづこにても大抵ぢを用ゐるべし。但し、本來の國語には、一音の語にてぢと書くべきものなし。

七 ず づ

二五

ずづの相紛るゝ場合

紛る。

二六

ずの假名を用ゐる語

(一)一音のもの。

およそ次の如し。

- ▲ず(不)。
 - ▲いしず(礎)。
 - ▲こず(稻)。
 - ▲すず(鱸)。
- (二)中にずと書くべきもの。

- ▲すずし(清)、(涼)。
- ▲すずし(生)、(絹)。
- ▲すず(菘)。
- ▲すず(雀)。
- ▲すず(漫)。
- ▲たゝず(む)、(行)。
- ▲なず(ら)、(ふ)、(準)。
- ▲ねず(鼠)。
- ▲はず(機)。
- ▲ひず(金)。

(三)尾にずと書くべきもの。

- ▲か(ず)、(數)。
- ▲かな(ら)、(ず)、(必)。
- ▲き(ず)、(傷)。
- ▲く(ず)、(菖)。
- ▲す(ず)、(鈴)。
- ▲す(ず)、(錫)。
- ▲は(ず)、(筥)。
- ▲ま(ず)、(交)。
- ▲み(ず)、(蚯)、(蚓)。
- ▲も(ず)、(鵲)。

(四)上にいへるものの外、信ず、生ずなどすべて連濁にてずと書くべきもの。

【づの假名を用ゐる語】 前に擧げたるずを用ゐるべきものの外、いづこにても大抵づを用ゐるべし。但し、本來の國語には、一音のものにづと書くべきものなし。

八 ア列の假名 エ列の假名 オ列の假名

【ア列エ列オ列の假名の相紛るゝ場合】 ア列とエ列との音は、下にウの音に連なるとき、オ列の音に轉ずることあり。されば、うまたはふの上には、これらの假名は相紛る。

【エ列の假名を用ゐるべき語】 ウの音の上において、オ列の音に紛るゝエ列の假名を用ゐるべきもの、本來の國語にありては、次の如し。

▲うれふ（憂）

▲けふ（今日）

▲ゑふ（醉）

【オ列の假名を用ゐるべき語】
べきものは、次の如し。

▲かげろふ（陽炎）

▲かげろふ（蜂蟻）

▲きのふ（昨日）

三

【ア列の假名を用ゐるべき語】 ウの音の上において、オ列の音と相紛るゝ假名を用ゐる語の中に、前に擧げたるエ列の假名及びオ列の假名を用ゐるべきものの外は、すべてア列の假名を用ゐるべし。

第二章 字音假名遣

三

【相紛るゝ假名】

字音を寫すときに相紛るゝ假名は、およそ次の如し。

- 一。い、ゐ。
- 二。え、ゑ。
- 三。お、を。
- 四。か（が）、くわ（ぐわ）。
- 五。じ、ぢ。
- 六。ず、づ。
- 七。あう、あふ、おう、をう、わう。

- 八。かう(かう)かふ(がふ)こう(こふ)くわう(ぐわう)。
- 九。さう(さう)さふ(さふ)そう(ぞう)。
- 一〇。たう(たう)たふ(たう)とう(どう)。
- 一一。なう(なう)のふ。 一二。はう(ばう)はふ(ばふ)ほう(ほう)。
- 一三。まう(まう)。
- 一四。いう(いふ)ゆう。
- 一五。やう(やう)えう(えう)えふ。 一六。らう(らう)らう。
- 一七。きやう(きやう)けう(けう)げふ(げふ)。
- 一八。しやう(じやう)しやう(じやう)せう(せう)。
- 一九。ちやう(ぢやう)ちやう(ぢやう)てう(てう)てふ(てふ)。
- 二〇。ひやう(びやう)ひやう(びやう)へう(べう)。
- 二一。みやう(めう)。
- 二二。りやう(りやう)れう(れう)。
- 二三。きう(ぎう)きふ(きふ)。
- 二四。しう(じう)しふ(じふ)しゆう(じゆう)。
- 二五。ちう(ちう)ぢゆう(ぢゆう)。
- 二六。にう(にう)にゆう(にゆう)。

二七。りう(りう)りふ(りふ)りゆう(りゆう)。

かやうに相紛るゝ假名は甚だ多きが故に、字音假名遣を辨へてこれを記憶せんことは、容易ならず。必要あらば、一つ一つ字書に就きて知るべきなり。たゞ次に通則を掲ぐ。

三

通則第一

- ▲い 衣依。 ▲お 胃、渭、蝟、謂。 ▲ゑ 會、繪。 ▲ゑん 遠、猿、園。
- ▲か 可、何、河、苛、荷、歌。 ▲くわ 果、菓、夥、課、顆。 ▲かう 交、效、校、狡。
- 郊、絞。 ▲かふ 合、恰、閣。 ▲こう 工、紅、功、攻、貢、控。 ▲しやう 尙。
- 掌、裳、賞、償、常。 ▲しやう 松、訟、頌。 ▲せう 召、沼、招、昭、照、詔。 ▲せふ 捷、睫。

かやうに構造に似たるところありて、字音の同じき漢字は、その字音假名遣もまた同じきこと多し。但し、江、肛、巧、腔などはかうなり。また溝、構、購などはこうにて、講はかうなり。寺、侍、侍、時などはじにて、持、峙などはぢ、また汝、如、恕、など、敍、徐などはじよにて、女、除はぢよなり。

四

通則第二

▲あん 暗庵 ▲いん 音因寅 ▲えん 掩烟演 ▲おん 音
 恩 ▲わん 腕 ▲おん 員 ▲ゑん 怨遠圓 ▲をん 怨遠

かやうに構造に似たるところありて、字音が五十音圖の同じ行に通ふ漢字は、その字音假名遣も同じ行に通ふこと多し。但し、隠はおんいんなれど、穩はをんなり。

五

通則第三

▲あふ 押 ▲かふ 甲合 ▲たふ 答 ▲こふ 洪公 ▲きよう 共 ▲しよう 松勝 證
 ▲えう 天 ▲けう 喬曉 ▲せう 笑燒召 少 ▲てう 超朝 ▲べう 廟秒苗 ▲めう 妙猫

三

通則第四

かやうに構造に似たるところありて、字音が五十音圖の同じ列に通ふ漢字は、字音假名遣も同じ列に通ふこと多し。

▲とやう 騰桶登 用 ▲たう 湯 ▲やう 揚羊 詳 ▲せい 才 ▲せい 生 水 ▲さい さい たい たい ▲せい せい たい たい ▲すゐ 水 ▲あひ 愛 ▲ねい 寧 ▲めい 名 ▲えい 榮 ▲はい 敗 ▲ゆゑ 唯 ▲かい 改 ▲かい 平 ▲らい 賴 ▲れい 類 ▲らい 類 ▲けい 計 ▲まい 毎

三

通則第五

かやうに字音にてア列とエ列との音の下につくイの音はいと書くべく、ウ列の音に限りては、その下につくイの音をゐと書くべし。

ふけい 父兄
きやうだい 兄弟

ていねん 丁年
ちやうじ 丁子

めいち 明治
みやうにち 明日

せいと 生徒
いつしやう 一生

こうへい 公平
びやうどう 平等

めいれい 命令
りやうじ 令旨

かやうに、一つの漢字に二様の音ありて、一つはけいせいなどとやうに、エ列の音にいの音のつきたるもの、一つはキヨウ、シヨウなどとやうに、オ列の音にうの音のつきたるものなるときは、そのキヨウ、シヨウなどをア列の音にうの音のつきたるきやうしやうなどとやうに書くべし。

三

通則第六

だいく 大工
こうげふ 工業

せうづ 小豆
ゑんどう 豌豆

くじゆ 口授
こうとう 口頭

ぶぎやう 奉行
ほうこう 奉公

かやうに、一つの漢字に二様の音ありて、一つはくづなどとやうにウ列の音一つはコウトウなどとやうにオ列の音にうの音のつきたるものなるときは、そのコウトウなどを、オ列の音にうの音のつきたるこうとうなどとやうに書く。

三

通則第七

がつぺい 合併
がふどう 合同

じつせん 十銭
じふゑん 十圓

ざつし 雜誌
ざふきん 雜巾

りつは 立派
りふざう 立像

廣島縣立徳海井学校
才三学年
繁原 策 登



大正元年十月十七日
大正元年十月十四日
大正元年八月廿三日
大正元年八月二十日
訂正再版發行
訂正再版發行
發行

著者	新 村 出
發行者	東京市小石川區小日向水道町七十三番地 西 野 虎 吉
印刷者	東京市本所區番場町四番地 平 井 登
發行所	東京市小石川區小日向水道町七十三番地 関 成 館
西部販賣所	大阪市東區心齋橋通北久寶寺町角 三 木 佐 助
東部販賣所	東京市日本橋區數寄屋町九番地 林 平 次 郎

新定日本文典
改正定價金五拾五錢
定價金五拾九錢

(關印場工分所本社會式株關印版西)

附 錄

かやうに一つの漢字に二様の音ありて、一つはがつじつなどとやうに促音一つはゴウジウなどとやうに、下にウの音のつく長音なるときは、そのゴウジウなどを促音のつをふに改めたるがふじふなどとやうに書くべし。

二四

附錄 假名遣大要 終

